

北九州芸術劇場＋市民共同創作リーディング

平成24年度

Re:北九州の記憶

戯曲集



## はじめに

私たちが記録として知っている「街の歴史」には当然のことですが、私たちの身の回りの、ごくごく個人的なことについては記されていません。ですが、確かに当時を生きた人達はその場所に住んで、日々を暮らしていました。その時代に生きた家族のこと、仕事のこと、結婚のこと・・・様々なエピソードの「個人の歴史」が集まるとそれもひとつの「街の歴史」になるのではないのでしょうか。

「Re:北九州の記憶」では、北九州市に暮らす高齢者の方々に、地元の若手作家がインタビューを行い、1つのエピソードから発想を得た新しい物語を作りました。

この作品を通して、過去も未来も主役はこの街に暮らす私達である事に気付く事、そしてこの作品達が、この街の財産となる事を目指しています。



## 目次

ある出会い（戸畑 鞘ヶ谷グラウンドにて）	作	鶴飼秋子	1
もやもや橋	作	脇内圭介	19
大小の果て	作	脇内圭介	33
彼らは防空壕で	作	穴迫信一	50
小倉の話	作	穴迫信一	68
八幡へ帰る	作	塩津順子	83
父と歩く	作	塩津順子	93
穏やかな追憶	作	藤本瑞樹	100
門司にて	作	内藤裕敬	120

ある出会い ― 戸畑 鞘ヶ谷 グラウンドにて ―

作 鷓飼 秋子

【登場人物】

室島 文子 (ムロシマ フミコ) 23歳

大庭 敏旦 (オオバト シアキ) 25歳

敏旦 戸畑は、初めてですか。

文子 はい。

敏旦 そうですか。(指をさして) 海が見えるでしょう。

洞海湾です。「くきのうみ」って言ったりもする。

空から見ると、植物の茎のような形をしているんです。

はい・・・綺麗です。

きれいか・・・うん。文子さんには綺麗に見えるんですね。

え。

僕も綺麗だと思います。小さな頃からずっと見ている海です。

文子 はい。

敏旦 文子さん。今日はこれから競技場に行きましょう。ラグビーの試合がある。

文子 ラグビー？

敏旦

セイテツの試合があります。

文子は帽子をとる。

そこは鞘ヶ谷競技場（現在の北九州市立鞘ヶ谷陸上競技場）。

当時は、八幡製鐵所の私有グラウンドだった。

八幡製鐵ラグビー部は昭和二年（1927）に創設。

（当時は「八幡製鐵所ラグビー部」）。

第二次世界大戦中は活動を余儀なくされたものの、

昭和二十三年（1948）には、活動を再開した。

敏旦

ラグビーを観たことは？

文子

ありません。

敏旦

セイテツのラグビー部は強いですよ。戦争の間は活動が止まっていたけど、

ここ二、三年で活動を再開して、ぐんぐん実力を伸ばしたんです。

文子

そうですか。

敏旦

なんと昨年の全国社会人大会で、トヨタを三十二対0で破って優勝だ。今

日は練習試合だけど、それでも充分見ごたえはある。

文子

お好きなんですか。

敏旦

いや、ラグビーが特別好きって訳じゃないけど、それでも熱くなるものは

あります。セイテツはこの町の誇りですから。

文子

はい。

敏旦 文子 敏旦 文子

今日は、天気が良くてよかった。

あの。

はい。

よく判りましたね。

はい？

私のことです。

駅でのこと？

はい。

そりゃ、写真を見ましたから。

はい。

あなたも、すぐに判ったでしょう。僕のこと。

私も写真を見て来ました。なるほど、と。

見てください。相手チーム、四股（しこ）を踏んでいる。

は？

整列をして、試合開始前に、みんなで、四股。面白い士気の高め方だ。

あの。

はい。

私の話、ですが。

はい。

・・・もう結構です。

敏旦 あなたが、あの駅で「触らないで」と大声で叫んだことですね。

文字 ・ ・ ・。

敏旦 実に朗らかな声でしたね。僕は失って気にしていません。

文字 ・ ・ ・。

敏旦 お互い様だ。

文字 ・ ・ はい。

敏旦 あなたは、あの駅で目立っていたんです。すぐに判った。

#### 間

文字 私は、その、馬鹿にされてるんだらうと。

敏旦 ・ ・ ・。

文字 あんまりにも、あそこにいる人達が私のことを見るもんだから。きっと田舎者が来たって馬鹿にしてるんだらうと。

敏旦 ・ ・ ・。

敏旦 (グラウンドを見て) へえ、なるほど。

文字 ・ ・ ・ はい？

敏旦 はい？

敏旦 さあ、試合が始まります。

試合の開始を告げるホイッスルが鳴る。

敏旦 (仕切りなおして) ひとつ、ラグビーは陣取りゲームです。

文子 は、はい。

敏旦 二チームの選手が、ボールを奪い合い、ボールを持って敵の陣地に攻め入

る。あそこに棒が二本立っているでしょう。あれがゴールポストです。あれより向こう側にボールを持って行って地面に着ける。これがトライ。5点もらえる。

文子 はい。

文子、少し前に出て、集中して試合を見ようと努める。

文子 (試合を見ながら) 転んだ。

敏旦 ああやって、ボールを持っている選手に飛び掛って邪魔をする。

文子 はい。

敏旦 文子さん、あんまり近寄ると、ときどき泥が跳ねてきます。

文子 あ、はい。(後ろに下がる)

敏旦 眺めていれば、そのうちどういものかわかりますよ。

文子 (頷く)

間

二人は、試合を眺めている。

敏旦 文子さんは、生まれも阿蘇、ですか。

文子 いえ。熊本です。熊本市。

敏旦 へえ。一度、熊本城には行ったことがあります。

文子 熊本城のすぐしたの、下通りというところに住んでいました。城下町だったんです。

敏旦 あの辺は、結構な街中でしょうか？

文子 ええ、だけど街は空襲ですべて焼けてしまいました。父が医者なので、内科を開いていたんですけど、それもできてなくなってしまうて……。それで小国に疎開したんです。

敏旦 そうでしたか。じゃあ、今日は、正しくは小国から来たわけだ。

文子 はい。阿蘇には、熊本から小国に向かう途中で寄りました。「大観望」っていうんですか。

敏旦 ああ、素晴らしい景色ですよ。僕も行ったことがあります。あそこに立つと、なんていうか雲の上に乗って山を見渡しているような、自分が神様になったような、そんな気分になる。

文子 私は、「大変なところに来てしまった」と思いました。

敏旦 大変、っていうのは、その、「ひどく田舎だ」ってことですか。

文子 ……。

敏旦 文子さんは、よっぽど都会育ちなんだなあ。

文子

そういう訳では・・・私は小国に住んでもう五年になります。熊本にはほとんど戻っていませんし。小国の暮らしにもすっかり慣れて。友人と九重に山登りに行っていたくらいですから。

敏旦

山登りは好きなんですか。

文子

好きか、と聞かれると・・・。

敏旦

趣味は、なにかありますか。

文子

趣味、ですか。

敏旦

あるでしょ、趣味のひとつやふたつ。

文子

あの、そうですね・・・歌うことが好きです。

敏旦

ほお。

文子

女学校でも歌をしていましたし。歌は小さい頃から好きで。父が蓄音機を

敏旦

聞いている横で、いつも歌ったり踊ったりしていました。

敏旦

それは、愉快だ。

文子

日舞も小さな頃から習っていました。

敏旦

ふうん。なんだかタックルが突っ張りみたいですねえ。

文子

はい？

敏旦

相手チームです。ぶつかっていくのが、どことなく力士のようじゃないですか。相撲の経験者が多いのかもしれないね。

間

文子

(話の腰を折られたので、語気強く) ああ。

敏旦

はい。

文子

敏旦さんは、歌は。

敏旦

僕、ですか？・・・いやあ、僕は、歌は全然駄目だ。

文子

音楽は好きですか。

敏旦

いや、音楽も全然守備範囲ではない。

文子

踊り。

敏旦

いや。(まったく)

文子

・・・。

敏旦

あらためて考えると、なんだろう。これといった趣味は・・・。

文子

ありますか。

敏旦

ありませんね。

文子

・・・。

敏旦

いや、本当に思い当たらない。

文子

(がっかりした様子で) 趣味はないんですか・・・。

敏旦

そう、溜息交じりに言われてしまうと、自分がひどくつまらない人間のよ

文子

うに思えてきますね。

敏旦

趣味のひとつやふたつ、と仰ったから。

敏旦

ええ、そうでした。

間

敏旦 あの手、今走っている。

文子 ……。

敏旦 わかりますか。

文子 はい。力士のような。

敏旦 それは相手チームです。ほらボールを持って、走って……パスした。

文子 はい。

敏旦 体は小さいですけど、足が速いですね。

文子 そうですね。

敏旦 速いだけじゃない。相手の動きを瞬時によんで、体を方向転換する。くる

くる動きますね。あいつばかり見てしまう。

敏旦・文子 あっ。

文子 転んだ。どこか怪我したんじゃないでしょうか。

敏旦 また、スクラムか。なかなか点が入らないな。

敏旦、近くに落ちているラグビーボールを取りに行き、腕に抱えて、

元の場所に戻る。文子は、その様子を見る。

敏旦

ほら、文子さん。

敏旦は、文子に向かって、ラグビー選手のように、  
ボールを横にパスする。

文子、ボールを受け取る。

敏旦

ね、こうして投げているでしょう。ラグビーは、前に向かってボールを投げちゃいけない。だから後ろにいる選手に投げる。

文子

はい……。

敏旦

はい。(ボールを受け取ろうと手を出す)

文子

(要領を得ず、体を敏旦に向け、ボールを前に投げる)敏旦さん、この辺りは、買い物をする場所がありますか。

敏旦

この辺りって、この鞘ヶ谷の辺りですか。(ボールを横にパスする)

文子

いえ、戸畑に。(ボールを前に投げる)

敏旦

ありますよ、商店街がある。さつき戸畑駅から歩いて電停まで行ったでしよ、あの電停が浅生通りです。(横にパス)

文子

商店街以外にも、その、デパートやなんかは。(前に投げる)

敏旦

井筒屋がありますね。だけど行くなら小倉まで行かないと。電車で行くのが良いです。文子さん、投げるときは、こうです、(振りをして) こう、横。

文子

はい。(見よう見マネで振りをしてみる)

敏旦

そうそう。(ボールを横にパス)

文子

買い物は好きですか。(なんとかボールを横にパス)

敏旦

買い物ですか。いや、しかし、文子さんは好きそうですね。(横にパス)

文子

ええ。着るものとか食べものとか、買わなくてもいいんですけど。(横にパス、以下繰り返しパスし続ける)

敏旦 僕は・・・そう、興味はない。いや、僕は、その、男ですからね

おつ、あの選手、でかいなあ。

文子 では、乗り物は？電車とか汽車とか。そう、電車なら、熊本にもありましてから私も乗り慣れていきます。

敏旦 乗り物？路面電車は確かに便利ですね。

文子 それか、ラビットスクーターなんてお好きなのは。

敏旦 そうですね・・・ああ、乗り物でいえば、戸畑は船にも乗れますよ。若戸渡船。さっきの洞海湾、あれを渡って若松まで行けます。

文子 船？（ボールをパスせずに止める）

敏旦 ポンポン船。

文子 ポンポン？

敏旦 ええ。ポン、ポン、ポン、ポンって音がしますからね。

文子 ・ ・ ・ 海を渡るなんて、そんな。

敏旦 海もいいですよ。洞海湾はそう広くないけど、それでもいろんな国の湾や港につながってるんだ、って想像できる。

文子 ・ ・ ・

敏旦 海が嫌ですか？

文子 そうではないんですけど。

敏旦 船が嫌？

文子 船で行くようなところに、わざわざは・・・。

敏旦 若松は島じゃないですよ、陸続きだ。それに商店街だってあります。

文子

そうですか……。

敏旦

文子さんは、街の暮らしが好きなんですね。

文子

(説明するのが嫌になつて)……敏旦さんは？(前にパスを出す)

敏旦

うん……街は、壊れるでしょう。確かにだいたい活気は戻った。だけど、八幡なんか三度も空襲にあつて、全部燃えきつてしまつて。あの時は、見る影もなかったんだ。だからね、変わり者だと思ふかもしれないけど、僕は山とか海とか、そういう場所に憧れるんですよ。(ボールをパスせず止める)

文子

私は、ただ……熊本が懐かしいんです。

間

いつの間にか、二人の間を歩き来していたボールが止まっている。

敏旦

まだ点が動きませんね。

文子

あんなに五人も六人もしかからなくても。

敏旦

最後にのしかかったやつ、あの選手もいいですね。

文子

体の大きな人ですか。

敏旦

ええ。彼は、ボールを持って向かってくる選手をバタバタ倒すですよ。

文子

はい。

敏旦

お、来た来た来た。捕まえろ！彼は、戦車ですよ。キャタピラーのついた。よし、倒せ！

文子

ああっ。

敏旦

踏み潰せ！

文子

だめ！

敏旦

いけ、逃がすな！

文子

やめて、逃げて、早く。

敏旦

文子さん、それは、敵ですよ。

文子

(言葉を無視して) 転ばないで、お願いだから。ああっ。

敏旦

よし、倒した。

文子

・・・。

敏旦

おっ、とつた、行け、走れ。あれ、さっきの速いやつですよ。

文子

ああ、触らないで、やめて、来ないで。

敏旦

そうだそうだ、そのまま死ぬ気でいけ。

文子

(ブツブツと) お願いします。お願いします・・・。

敏旦

そこだ、行け、ぶっ飛ばせ、行け、行け、行け、行け、行ったー！

トライが決まり、ホイッスルが鳴る。

敏旦

あいつ、零戦だなあ。

間

二人とも、しばし呆然としている。

敏旦 …… そうですね、楽しいでしょう。

文子 …… 何人の人が転んだんでしょう。

敏旦 いや、すごい！ 実にすごかった。最後の追い抜き。彼は注目株です。

文子、試合を見るのをやめ、地面を見る。

敏旦 どうかしましたか。

文子 私たちは……どこか似ているところがありますか。

間

敏旦 うん……どこか……うん。そうですねえ。

長い沈黙。

敏旦、ラグビーボールをいじる。

文子 私と……あなたとは、

敏旦 ひとついいですか！

文子 は？

敏旦 いや、その、少し気になっていたので、いや随分前から気になってい

文子

たんですが、文子さんのお宅はもしかして、女中さんなんかがいまいたか。え？・・・ええ、はい。熊本の頃は。

敏旦

何人ですか。

文子

二、三人、住み込みで働いてくれました。

敏旦

人力車なんか使っていましたか。

文子

え？はい。父が往診のときに。

敏旦

はあああ。(大きさに溜息)

間

敏旦

文子さん。僕はね、役所に勤めているんです。戸畑市役所。うちには女中はいないし、人力車も乗りません。あなたに苦勞をさせてしまうんじゃないだろうか。

文子

・・・(無言)

敏旦は、ラグビーボールを元あつた場所に向かって投げる。

文子は、見るものもなくなり、地面を見ている。

二人の間に沈黙が流れる。

ふいに、文子のお腹がグーとなる。

文子、咄嗟にその場にしゃがみ込む。  
敏旦、文子を見る。  
文子は、うつむく。

間

敏旦 くつくつくつく。(噛み殺して笑う)  
文子 なんですか・・・。  
敏旦 あはははははは。(大声で)  
文子 なんですか、なんですか。  
敏旦 くつくつく、ぶはっ。(笑いをこらえようとするが、こらえきれない)  
文子 (なんだか怒って) 私だって、二十三にもなって、切羽詰っているんです！  
敏旦 (笑って) 二十三にもなって。お腹が減って？  
文子 (やっぱり怒って) はい！お腹が減って！  
敏旦 さあ、立って。

敏旦、文子に手を差し伸べる。  
文子、少し顔をあげ、敏旦の手を見る。

間

敏旦

思い出しました！

文子

はい？（しゃがんだまま、思わず敏旦の顔を見る）

敏旦

僕の趣味。麻雀です。これは、同僚としょっちゅうやってる。昨日も、家  
に大勢やってきて、夜中までしていました。僕だけじゃない、姉も好きです。

いや、姉だけじゃない、一族郎党みんな好きだと言っても過言ではない。

文子

・・・

敏旦

麻雀。これはどうでしょう。

文子、すくつと立ち、スカートについた草をパンパンと払う。

敏旦

（文子の顔色を伺って）・・・

文子

（歌う）

♪とんなんしゃーпей りゅーふあーふあー

ふあーりゃんすげれば ころろがおどる

おどるころろに そらほら

まてばうれしい そらほら♪

敏旦、呆気に取られる。

文子

父が家で麻雀大会を開いていたんです。この歌を流して、私はそれに合わせて踊って。お客さんが誉めてくださるから、それが嬉しくて。私がまだ、幼い頃の話です。

敏旦

・・・そうですか。

文子

ええ。

敏旦

そうでしたか。

文子

母がライスカレーを振舞って。

敏旦

うん。

文子

私にも・・・ライスカレーなら、作れるかもしれません。

敏旦

いいですね。楽しみです。

文子

(頷く)

敏旦

僕も腹が減った。さあ、行きましょう。

文子

はい。

二人は、歩き出す。

もやもや橋

作 脇内圭介

【登場人物】

矢永敬之介（30歳）・・・矢永家の6人兄妹の長男

妹・・・敬之介の妹

弟・・・敬之介の弟

おじさん・・・敬之介の伯父

藤島小百合（26歳）・・・後に敬之介の妻になる人

1962年（昭和37年）12月の朝。

矢永家では忙しく人があつちこつち行きかっている。

矢永敬之介は真新しいスーツを着て居間にいる。縁側に座り、ジーンと洞海湾側を見つめて物思いにふけっている様子。

そこに敬之介の妹が現れる。

妹                   ねえねえ、お兄ちゃん、どう？

矢永               （少し間があつて振り返り） どうつて？

妹                   もう！また？何よその反応！

矢永  
ん？

妹  
もう！うといわね

矢永  
ああ、そういうことか

妹  
そういうことかじゃないわよ、今日は見違えてキレイだね、とかないの？

矢永  
そんなの兄妹に言うセリフやないやろ

妹  
こういうときは言っておくものよ、というか言つてよ、こんな素敵な日くらい。お兄ちゃんだって、兄妹がきれいな方が顔も立つでしょ？

矢永  
・・・(ぼーっとしている)

妹  
ねえ、そうでしょ？

矢永  
ん？ああ、遅いね

妹  
遅いねって・・・今話し聞いてなかったでしょ

矢永  
ああ、ごめんごめん

妹  
最近ずっとその調子じゃない。今日は兄ちゃんが主演なんだからね、しゃんとしてよ！

矢永  
あーはいはい、そうですねえ

妹  
何よそれ

矢永  
え？何それって、どれ？

妹  
ちっ、ちよつとお！お兄ちゃん！

そこに弟が現れる。

ねえちゃんやめりっちゃ

邪魔せんで。あんたは準備でもしとき

もう終わったよ

あら珍しい。いつもは6人の中で一番遅いくせに

今日は特別な日やもん、いつものお出かけとは違うよ

そうよねえ、そうやろう？なのにお兄ちゃんったら

にいちちゃん緊張しとるんよ、ねえ？

・・・(聞こえていない)

そんなんわかっどるけどさ、でもほら、見てよあれ

矢永、相変わらず縁側でボーっと海を見つめている。

弟　　・ ・ ・ あれよ、なんか、あれはあれで、気合い入れとるんよ、

にいちゃんなりに

でもさ、毎日この調子よ？

ほら！船が気になるんじゃない？

何言ってるのよ、今丁度船なんて一隻も見えないわよ

ほら、戸畑の、様子とか

様子って？こんな遠くからみて何がわかるのよ

じゃあ、ほら、若戸大橋とか！

弟 妹 弟 妹 弟 妹 弟

妹 矢永 弟 妹 弟 妹 弟 妹 弟

妹 確かに最近開通したばかりで、夜なんか綺麗だけど、今まだ朝よ？赤いだけよ？

弟 ・ ・ ・ わかった、認めるよ。最近にいちゃん、ちよつと変

妹 そうでしょ？私はね、決して何かが気になつててポーつと外見てるわけじゃないと思うのよ、もちろん緊張でもないと思うわ

弟 じゃあ、何？

妹 それがわからないからヤキモキしてるんじゃない！

弟 そ、そうだよねえ

妹 このまま式を迎えるんじゃないかと思うと ・ ・ ・ ねえ？

弟 確かに

妹 ほら、もう3時間もすれば始まるのよ？私らはいいけど、向こうのご両親

とか、お父さんの昔の仕事仲間とかもくるんやけ

弟 え？石炭商の？

妹 (矢永に) ねえ、そうでしょ？

弟 ・ ・ ・ ん？

妹 だから、お父さんが石炭商しよつたときの仲間の人たちも呼んでるんでしょ？

弟 おお、呼んごるよ、俺がちいちゃい時からお世話になつとるけ

妹 あれやろ？昔、にいちゃんお年玉いっぱいもらいよつたんやろ？

弟 (急に食いつき) そうそう！お父さんがさ、俺が6歳くらいのときに名刺作つてくれてさ、正月に挨拶がてら名刺渡して、代わりにお年玉もらいよつた

弟 いいな！俺はまだ産まれてもないときやし  
矢永 俺のときは日本で一番もうかつとる時期やけな、中身もかなり多かつたと  
思うけどのお

弟 ちよつと前もお父さんの景気良かったのね

矢永 うちだけやないよ、若松全体が景気良かった

弟 まあね。朝鮮戦争様様ですなあ

妹 もー！おにいちゃんさあ、石炭商の話するときだけはちゃんと聞くんだから！

矢永 馬鹿やろう！矢永家の長男として父の仕事に誇りを持つのは当たり前前  
事！

妹 そんなのはいいのよ、今よ今！まさにこれから始まることに集中してもら  
わないと困るの

矢永 これから？・・・ああ、そつか  
妹 ほら、私の話は聞いてない

妹 ・・・  
妹 私は心配なの！ここ数日ずつと落ち着きないじゃない、家にいても意味も  
なくうろろうろしてたりするし。落ち着いたと思ったら今みたいにボケーつ

と上の空でしょ？まあでも式の日くらい大丈夫だと思ってたのに、見事に  
裏切って

矢永 相変わらずそんななんだから！

・  
・  
・

弟

妹

弟

妹

矢永

妹

弟

矢永

妹

矢永

妹

矢永

弟

た、確かにさあ、最近の兄ちゃんちよつとおかしいけど、そりゃさ、兄ちゃんだって今日に向けて考えることがいっぱいあるんじゃない？ほら、だって、やつと掴んだわけでしょ？

まあ、それはそうね・・・30になってやつとだものね！  
ちよつと、それは言わない約束！

もうこの際言うわ！私だってお兄ちゃんを尊敬してるからさ、おにいちゃんより先に結婚するわけにはいかないって、今日まで我慢してたのよ。  
あんたもそうでしょ？

まあ、俺はまだ大丈夫だけど・・・

私は女なんだからね、男のように行かないんだから！

すまん

え？

にいちゃん？

すまん！

・・・もういいわよ、おにいちゃん今日で晴れて結婚するんだから

それは・・・それは・・・どうだろう

どうだろうって、何言ってるの？ねえ、ちよつと何よそれ、ねえ

あ、いや

もう二人とも！こんなおめでたい日は一生に一度しかないんだからさ、楽しく仲良くいこうよ！ね！

妹 ……それもそうね。式の際はちゃんとしてくれるっておにいちゃんを信

じるわ

矢永 うん……そうなるように、祈っててくれ

玄関の扉の開く音がする。

矢永、その音に敏感に反応し、そわそわし始める。

妹 誰かきたわ

弟 もしかして、小百合さん？

玄関の方でおじさんの声がする。

おじさん（声） 敬之介ー！

弟 あ、建一おじさんだ！

妹 間違いないわね！

矢永、急にしよんぼりして縁側に座る。

弟 にいちゃん？どうしたの？建一おじさん来てくれたみたいよ？

矢永 そうやねえ

妹 ちよつと、挨拶に行かなきゃ！

おじさん（声） 敬之介ー！俺ちよつと散歩行くけなーまたあとでー

妹 おにいちゃん！

矢永

・  
・  
・

もう！・・・はい！またあとでー！

妹

散歩・・・

弟

ふう。おじさん昔と変わらないみたいね

妹

だね。久々に会うなあ、建一おじさん

弟

あの自由な感じ、好きだよ

妹

そうだね、ずっとあのままがいいな

弟

しわは増えてもきつとあのままだわ、おじさん

妹

従兄弟に会うのも楽しみだなあ

弟

そうね

弟

そういえば、小百合さんとは最近いつ会ったの？

矢永

・・・半年、前

弟

あ、ああ

妹

半年も？

矢永

大丈夫だよね？

妹

え、何が？

矢永

いや、大丈夫、大丈夫・・・なあ？

弟

え、う、うん、大丈夫でしょ

矢永

だよなあ、よかった・・・よかった

妹

え、何が？

弟  
わかんない

車の音が近づき、家のすぐ近くで停まる。ドアの開く音。

あ！来たんじゃない？！

小百合さん？

どうだか

うわー写真しか見たことないから楽しみだなあ！

お兄ちゃん！ほら！何まだボーっとしてるの！迎えに行つてあげて！ほら！

違ったら、どうするんね

何言つてんの！きつとそうよ！

早く！にいちゃん早く！

私たち、家の中で待ってるから！

あーはいはい・・・

矢永、居間を出る。

どんな人なんだろ？

なんかね、農家の人だつて言つてたよ

へーそれは初耳

弟 妹 弟

矢永 妹 弟 妹 矢永

弟 妹 弟 矢永

妹 おにいちやんの仕事先の、小倉の方の病院の・・・  
弟 医院長のイトコさん、でしょ？  
妹 そうそう  
弟 いい人かな？  
妹 うん、きつといい人よ  
弟 きつとそうだよ

矢永、玄関から家の外に出る。

すると、家の下の方できよろきよろしている女性が。

女性、矢永に気づき近づいてくる。

小百合 良かった、着いた。ここなんですね

矢永 ……久しぶり……ですね

小百合 ええ、お久しぶりです

矢永 ……どうやってきた、のですか？あの、乗り物。ぎ、牛車とか？

小百合 そんなわけではないですよ。タクシーです。

あの、ついこの前出来た、あの橋渡ってきました

矢永 若戸大橋か？ですか？

小百合 そうです……大丈夫ですか？

矢永 大丈夫、え？大丈夫だよ、ですよ？

小百合 え？ええ、私は大丈夫です

矢永 あ の、ここにきてよかったですか？若松に、矢永家に  
小百合 え、ええ、もちろんです。じゃないと来ません  
矢永 よかったあ・・・よかった  
小百合 敬之介さん、ちよっと一回、深呼吸しましょう、一緒に  
矢永 ああ

二人、三度深呼吸をする。

小百合 ふふ。敬之介さんって、ちよっと変ね  
矢永 ・ ・ ・  
小百合 変って言ったら失礼かしら・・・そう、おもしろい人ね  
矢永 ああそうかい  
小百合 ふふふ、ごめんなさいね  
矢永 ・ ・ ・ ちゃかさないで下さい  
小百合 もう、普通に話していいわよ？  
矢永 ・ ・ ・ あの橋ができて、小倉から若松に来やすくなったでしょう？  
小百合 ええ。でも私、若松に来たの初めてで、その辺よくわからないわ  
矢永 わかっとなるよ・・・  
小百合 え？  
矢永 今日、何の日か知っとなるか？  
小百合 私たちの結婚式の日でしょ？

矢永 そうやな、そして、お前が初めてこの若松に、あの橋渡ってきた日や

小百合 ええ

矢永 ……今日までに、一回くらい、渡ってきてくれても良かったんやないか？

小百合 あ……

矢永 嫁になるんやったら、一回くらい挨拶にくるやろ

小百合 ……あ、あの、ごめんなさい。実家の仕事が忙しくって……

矢永 もうええ。もうええ。

小百合 本当にごめんなさい

矢永 ……もうええって。式が始まる前に、俺の両親と兄妹にちゃんと挨拶し

とつてくれ。俺も付いて行くけ

小百合 はい、しつかりご挨拶させていただきます

矢永 でも、ひとつ言っとく

小百合 なんです？

矢永 俺たちに子供とか出来て、そんで孫とか出来たら、絶対言ってるぞ

小百合 何を、ですか？

矢永 ……お前が結婚式の当日まで一回も顔出しにこんやったこと！

小百合 ……ふふ。いいですよ

矢永 絶対言うからな！絶対やけ！

小百合 ええ。だって、私が悪いんだもの

矢永 よし！ちよつとこつちこい！

小百合 ええ！

矢永と小百合、外へ出る。

妹、弟はその二人の様子を玄関から覗いている。

矢永、家の横の坂道を少し登る。

矢永 小百合さん、ここからほら、見てごらん

小百合 はい・・・あら、家から見えるのね

矢永 若戸大橋、ええ場所に来たもんよ

小百合 いいわねえ・・・私、これから毎日あれが見れるのね

矢永 そうだな、そうしてくれ

小百合 わかりました

矢永 なあ、小百合さん。あの橋の、あの赤は・・・

小百合 ええ

矢永 ずっとあのままかなあ

小百合 ・・・・どうでしょうね、時間が経てば塗り替えたりするんじゃないですか？

矢永 そうやな。でも、塗り替えるにしても、また同じ赤がいいなあ

小百合 ええ・・・そうですね

矢永 小百合さんのご両親は？

小百合 先に会場に

矢永 そうか・・・

矢永、手が震えだす。

小百合 あ、緊張してる

小百合、ふふつと笑った。

大小の果て

作 脇内圭介

【登場人物】

恒成巧（つねなりたくみ）小学4年生

岩田守（いわたまもる）小学4年生

農家のおじさん・・・糞尿を集めて回っている、一枝に畑をもったおじさん

1941年、夏の夕方。

小学4年生の恒成、岩田の二人は牛車を引いた農家のおじさんに案内されて「探し物」を探しに戸畑から小倉の一枝にある畑に到着した。

おじさん どれ、着いたぞ

岩田 うわー

恒成 広いなー

岩田 ずーっと畑しかみえん

恒成 一枝つち畑しかないん？

おじさん まあそうやな、ほとんど畑やないか？

恒成 そうなんやー

岩田 この辺は全部、汲み取りのおいちゃんのか？

おじさん うーん、まあ、あの小道の先に小屋があるやろ？

岩田 あのきたねえ小屋？

おじさん きたねえ言うな、まあ、その小屋からこつちまでは俺の畑や

岩田 えええ？！

恒成 すごいね！いっぱい野菜作れるやん！

おじさん まあな

岩田 牛君、君はここで働きよるんか？

牛 ……

岩田 おーい牛くーん

おじさん はっはっは！牛も歩き疲れとるんよ、勘弁してやってくれ

岩田 そっか。土つぼと俺達を乗せとったしな

恒成 年末、また野菜届けに来てな、牛君

岩田 それ、おいちゃんに言った方がええやろ

恒成 あ、そっか

おじさん もちろん届けるよ。俺たちは俺たちでいっぱいもらつとるわけやけ

恒成 うちにあつても使わんもん

岩田 あ、そうそう、おいちゃん、そのうちから集めたのはどこにあるん？

恒成 ああ

おじさん そうやったな……

あれよ（畑の端に方にある盛り上がったところを指差す）  
恒成・岩田、そのおじさんが指差す方を見る。

岩田 え？何いいよるん、そんなわけないやん

恒成 ほ？

岩田 なあ！

恒成 あんなんじゃ・・ないよ

おじさん じゃあ見に行つてみたらええ

岩田 行くよ、そのために来たんやし

恒成 どうやったらあんな・・いや、そんなわけない

おじさん、どこかへ行くこうとする。

恒成 ん？おいちゃんどこ行くん？

おじさん 俺は牛車を小屋に戻してくるけ

岩田 あのきたねー小屋？

おじさん そうそう、そのきたねー小屋よ

岩田 そっか、牛君ありがとう

恒成 おいちゃんもありがとう！

岩田 おいちゃんは牛君置いたらまた来てな！

おじさん はいはい

おじさん、牛車を引き連れて行ってしまう。  
恒成、岩田、おじさんが示した方へきよろきよろと周りを観察しながら歩き出す。

恒成

あの辺に見えるのも、全部そうなんかな！

岩田

たぶんそうなんやない？

恒成

何個か、あるな

岩田

あれ全部、俺達のつちことか？

恒成

げー！

岩田

げーって

恒成

げーやろ

岩田

げーやけどさ

恒成

うわっ

岩田

ううわっ

恒成

くっさー

岩田

なんじゃこりゃ

恒成

濃い、これは濃い！

岩田

この山からか！

恒成

この山からやろ

岩田

同じこと言った

恒成 なんつちゆう山や！これはもう・・・くさい山や！

岩田 そのまんまやないか

恒成 えへへ

岩田 えへへて・・・はあ、この山からどうやって探せばいいんや・・・

恒成 え？・・・あ、そうか

岩田 つね、お前、忘れとったやろ！

恒成 い、いや、忘れてないよ

岩田 お前のせいなんやけな！

恒成 わかつとるよ・・・探そう！行こう！

岩田 ・・・・

恒成 ほら、もうちよつと近づいてさ

岩田 つねが行けよ

恒成 一緒に行こう、二人で探した方がすぐ見つかるやろうし！

岩田 それはそうか

2人、徐々に『山』に近づく。

恒成 あれ？なんか・・・でかくないか？

岩田 うん、近づけば近づくほど、でけえ

恒成 ハエもいっぱいや

岩田 え？うわー俺達よりでけえぞ！

恒成 うん！大人よりも大きいんじゃないか？  
岩田 それは間違いないね、大きいよ  
恒成 こないっぱい積むんやなあ  
岩田 信じられん

おじさん、現れる。

恒成 あ、おじさん  
おじさん そろそろ慣れたやろ  
岩田 なにが？  
おじさん におい  
岩田 あ、たしかに  
恒成 くさいのはまだくさいけど  
おじさん どうね、見つかったね？  
岩田 まだ。こいつがちゃんと探さんけ  
恒成 言われんでも探しよるっちゃ。岩田も探してないくせに  
岩田 っち、だいたいツネが飲み込むけ悪いんやろ！  
恒成 仕方ないやん、おいしそうやったんやけ  
岩田 やけっち、飲み込まんやろ！  
恒成 そんな言ったら、お前が拾わんやったらよかつたんよ！  
岩田 なんね！今どこも売ってないんやし、拾うにきまつとるやろ！

恒成 イカの甲羅で充分やろ！充分消えるやろ！

岩田 あれの方がよく消えるんっちゃ！

おじさん ケンカやめんね。ここ来る前に何回やったね？もう見飽きた

岩田 ・・・・ごめん

恒成 俺もごめん・・・

おじさん よし、仲直り

岩田 ・・・・日が暮れる前に探し出そーや。ここから家まで結構かかる

恒成 うん、そうやね、一杖っち意外と遠いし

おじさん 遠くないやろ、お前ら拾って5分くらいしか歩いとらんやないか

恒成 俺達の家は、戸畑駅の近くやけ

おじさん ああ、そうなんね

岩田 初めっから一枝に来るつもりやったけさ

恒成 ここに汲み取りのおいちゃんが運びよるの知っとったけ

おじさん うまいこと俺に会えて幸運やったな

岩田 うん、おいちゃんにあっここで会わんやったらここまで来れんやった

おじさん とにかく30分はかかるやろうけ、早く見つけなな

恒成 もうだーいぶ暗くなってきたし

岩田 もたもたしすぎたな

恒成 よし！探すぞー！

岩田 うん。やけどさ、この山みたいに詰まれとるのから、どうやってあんな

小さいもの探すか・・・

恒成、少しずつ『山』の方へ歩き出す。  
それに続いて、少し後ろを岩田も付いていく。

恒成 おいちゃん、とりあえずこの山の中なんよね？

おじさん そうそう。ここ最近の分を盛ってあるけ、においも格別や、心して探せよ  
うぐ、確かにかぐわしい

恒成 あるとしたらどの辺かね？

おじさん まあ、どんどん上に投げるけ・・・

岩田 投げるん？！

おじさん おお

岩田 掴んで？！

おじさん いやいや、掴まんよ、スコップですくってから投げる

岩田 なーんだ

おじさん そんなきたねーもん手で触らんよ

恒成 でも、これ最後は畑に撒くんやろ？

おじさん 撒くよ

岩田 そうなん？

おじさん 発酵させてから使うんよ。あ、発酵つちわかるかね？

恒成 わからん

おじさん そーよな。これを寝かしとくんよ

岩田 ええ？！寝るん？おいちゃんアホやろ！

おじさん　　ははは。あのな、雑草とか枯葉の布団しいて寝るんぞ？

恒成　　布団しいて寝るの？贅沢やー！

おじさん　　しかもな、寝とる間にどんどん体が暑くなる

岩田　　てことは・・・汗かくん？

おじさん　　そうよー汗かいたら次はどんどんにおいがなくなる

岩田　　へえー

おじさん　　そしたら水浴びさしてやってなあ

恒成　　水浴びも？人間といっしょや！

おじさん　　そんで、ずーっと寝かしとったら、いい肥料になるんよ。そんでここに

岩田　　撒いて、野菜の種植えて、野菜作るわけ

え、じゃあ、正月とかにおいちゃんらが持ってきてくれる、

大根とかナスとか、うんこで出来とん？！

おじさん　　ん？うん、まあ、うん、うん、そうやね、うんこで出来とるね

岩田　　食ってしまった・・・

恒成　　人間はうんこで、うんこは野菜で・・・じゃあ野菜は・・・

岩田　　・・・

おじさん　　ははは、でも臭いとかせんかったやろ？

岩田　　あ、そうやった

恒成　　せんかったし、うまかった

おじさん　　そうやろ？そういう風にうまいことなるとるんよ

岩田　　ほー

おじさん よー考えてん。食った大根とかはどうなるんね？

恒成・岩田 うんこになる！

おじさん そうやな

岩田 なんかすげー

恒成 ぐるぐるまわつとるんやな！

おじさん すげーやろ？俺がわざわざ糞尿取りに行く価値は大いにあるっちゅーわけよ

けよ

岩田 そうか、野菜とか、肉とか魚とかの行き着くところがここなら・・・

恒成 岩田？

岩田、糞尿の山に今にも手で触ってしまいそうになっている。

恒成、おじさん、岩田を止める。

岩田 ぐっぐっ！

恒成 岩田やめろって！そうは言っても所詮うんこはうんこ！触ったら汚いて！

岩田 でも、この中には俺の宝物が！

恒成 やけど、その辺掘っても意味ないっちゃ！

おじさん 上に乗つとるはずやけ

恒成 ほら、岩田やめとき！

岩田、諦める。

岩田　じゃあどうするん？

恒成　この山の周り回ってみよう。

もしかしたら、どっか低いところが見つかるかもしれん

岩田　うん

おじさん　あ

恒成　え？

おじさん　ああ、いやあ。ちよつと待つとき

恒成　え、うん

おじさん、いなくなる。

恒成、岩田、糞尿の山の周りを歩き出す。

恒成　・・・うーん

岩田　・・・うーん

恒成　見たらんな・・・

岩田　あ！

恒成　みつかった？

岩田　違うけどあれ！

恒成　あ、あれ・・・ぱっちゃんか？

岩田

ばっちゃんや

恒成

ばっちゃんがこんなとこになんであるん？

岩田

・・・食ったんやない？

恒成

そんなばかはわしくらいしかおらん！

岩田

自慢にならん

恒成

えへへへ

岩田

・・・あつたらいいな

恒成

なかつたらさ、俺のイカの甲羅、全部やるけ

岩田

え、それはいいよ

恒成

でもさ、なんか悪いやん

岩田

いいっちゃ。俺んちまだいっぱい干してあるし

恒成

そうか・・・なんかさ、イカ食いたくなってきた

岩田

え？うんこ目の前にしてよくそういう気になるな

恒成

そろそろ夕飯の時間やし

岩田

たしかに。でもイカはもういらん

恒成

なんで？イカうまいやん

岩田

だってもう食べ飽きた。魚ももういいや

恒成

えーそれなら俺は鶏肉飽きた

岩田

いいやん！鶏肉！

恒成

イカとか魚とかの方がうまいっちゃ。うち、鶏ばっかりやけ

岩田

肉食いたい、肉！あー牛肉とか食ってみたいな！

恒成 あ、昔食ったことあるよ！うまかった！

岩田 ええーいいな！

恒成 アメリカ人って、牛肉ばかり食べるっちよ

岩田 えー贅沢やな！

恒成 やけ、体も大きくなるっち

岩田 アメリカ人見てみたいなあ

恒成 でも、鬼みたいな顔しとるけ、絶対怖いよ

岩田 え？鬼？

恒成 そうそう

岩田 まあ、でも、見ることはないやろ、俺達は

恒成 そうやね、日本国に入れもせんやろうし

岩田 あ、でも、飛行機乗ってくるかも

恒成 そんなわけないやん、だって、鬼みたいに大きい人が飛行機とか乗れん

やろ

岩田 そっか、飛べんか！

恒成 あー牛肉食べてえー

岩田 な！

恒成 なんかどんどん腹減ってきた

岩田 俺も・・・あの辺は牛肉食った後のうんこっち思ったら

恒成 なんかうまそうに

岩田 おも

恒成  
岩田  
恒成

え

るかーい

えっへっへっへ！あ！あ！あれ！

恒成・岩田、『山』の上の方を見る。

岩田  
恒成  
岩田  
恒成

あ！ほんとや！あれや！

絶対あれや！

あの雪のような純白の！もう間違いない

あんな上の方にささつとる・・・

くそー！どうすれば！

よし！おれ、取り行く！

いやいや、とり行くってどうやって？

のぼる・・・？

いいよ、もう

え、なんにいよるん？すぐそこやん

いいって。もう、諦めようと

岩田のやん

うん。でも、もう無理やろ、あれじゃあ

うーうーうん

おじさん帰ってくる。

おじさん

見つけたか？

恒成

うん。ほら、あそこ

おじさん

あ？ああ、あれね。てっぺんにあるやないね

岩田

やけ、もういいよ

恒成

おじさん、なんか岩田がこんな言い出したんよ

おじさん

まあ、諦めた方がええな

恒成

え

おじさん

うん、諦めなさい

恒成

ちよつとおじさん

おじさん

それより、これあげるけ帰り

おじさん、ジャガイモを3、4個ずつ渡す。

岩田

わ！いいの？

恒成

ありがと。でももうちよつと探す

おじさん

おめえら、もつと上ーの方も気にせんと

恒成

もつと上？

岩田

あ！もうこんなに真っ暗！

恒成

いかん！かあちゃんに怒られる！

岩田 俺も！

おじさん そうやろ。二人とももう帰れ

岩田 うん、そうする！なあ（恒成に）

恒成 うーん

おじさん これらはその内肥料になるけ、そんな時に見つけたらととつちやるけね

恒成 ・・・わかった。ありがと、おいちゃん

岩田 よし帰るぞ！イモ渡したら怒られんで済むかもしれんし！

恒成 そうやな！

二人、ランニングシャツの下の部分をめくり、

そこにもらったジャガイモを入れた。

おじさん 真っ暗になる前に帰れよ！

岩田 うん！

恒成 わかった！

二人、走り出す。

少し走って、恒成が振り返り止る。

恒成 おじさん！

おじさん  
恒成  
おじさん

はよ帰れ  
また明日！  
・・・おお、  
また明日

彼らは防空壕で

作 穴迫信一

【登場人物】

フトシ

ケンジ

シヨウタロウ

ツヨシ

四人は防空壕の中  
爆発音が轟いている

フトシ

また爆発した

ケンジ

家の方は大丈夫かね、心配や

シヨウタロウ

見に行こうや

フトシ

でも危ないよ、今ここから出たら

シヨウタロウ

でも心配やん

フトシ

そうやけど、それに先生にも怒られるし

シヨウタロウ

はあ

ケンジ

ここで死ぬんかな

シヨウタロウ

もう、やめろちゃ

フトシ

死なん死なん、大丈夫って

ケンジ

ここも爆撃を受けたら

シヨウタロウ

やめろっちゃ

フトシ

受けん受けん、ありえんよそんな

ケンジ

ありえるやろ、なんでわかるんか

フトシ

うけんよ

間

フトシ

そう思ったほうが良いやん

ケンジ

煙がたつとるんよ、隣の教室からも、正面のお店からも、

それでもここだけは受けんっちなんで分かるん

なんなんお前、うるせえちゃ、どつかいけちゃ

フトシ

やめりーよ、大丈夫やけ

ケンジ

死ぬの怖くないんか

シヨウタロウ

お前が怖がりなだけやろ

ケンジ

煙が臭くてたまらんよ、ここも臭いし

シヨウタロウ

はあ？

ケンジ

死ぬときの匂いやろ、これは

シヨウタロウ

お前、いい加減にしとけよ

フトシ

もうやめりーよ

ツヨシ

死なば諸共だがなあ

フトシ

え、

ツヨシ

死なば諸共だがなあ、子孫を残さずに死ぬのがねえ、辛い

フトシ

え

シヨウタロウ

なんちいったんこいつ、変な事いいよる

フトシ

でも確かにそうやね

ツヨシ

うん

フトシ

僕もそうやし

シヨウタロウ

僕もそうやけど、変なときにいうけやん

ツヨシ

まあ、死なんけど、死ねんけど、まだ

ケンジ

そうだ、じゃん

ケンジ以外

おお

ケンジ

模型飛行機

シヨウタロウ

出た

ケンジ

出た出た

フトシ

買ってもらったん？

ケンジ

買ってもらった

シヨウタロウ

勝手に作ったん？

ケンジ

勝手につく：いいやん、勝手に作ったって、僕のやもん

シヨウタロウ

そうやけど

ケンジ

なん？

シヨウタロウ

みんなでつくればよかったやん

ケンジ

ダメダメ、こういう高級品は君達にはまだ早いのです

フトシ

なんいいよん

シヨウタロウ

そんな高級品、なんでもとん

ケンジ

やけ買ってもらった

シヨウタロウ

誰に

ケンジ

お父さんに

ツヨシ

お父さん

ケンジ

お父さん：生きとるかな

### 爆発音

シヨウタロウ

もう帰ろうや

ケンジ

なんで

ツヨシ

この前、お父さんがキラキラの正体わかったっていいよったよ

ケンジ

え、なんて

フトシ

この前、墜落した米軍の飛行機やろ

ツヨシ

それぞれ

フトシ

すげー、あれ光りよったもんね

ツヨシ 違うんよ、それが光やないんよ、あれはジュラルミンなんよ

ケンジ え、なんそれ、そんなん聞いたことないんやけど

シヨウタロウ どうせ嘘やろ、適当やん

ケンジ ツヨシんとこのお父さん、なんしよんか分からんし

ツヨシ いったも色々書きよるし

ケンジ 何を？

ツヨシ シソー！

ケンジ なんそれ

ツヨシ やけお父さんの考えを書くんよ、お父さんは毎日それをかきよるけ

色んな事知つとるし、この前に墜落した戦闘機のキラキラもジュラ

ルミンで間違いないって言いよった！戦闘機を作つとるジュラルミ

ンがはげて墜落したって

お父さん：

お父さんは間違つてないよ

もう分かったツチャ

：俺のお父さんだつて間違つてない！

フトシ え

ちゃんと毎日働きよる！

そんなん誰も言つてないよ

俺のお父さんだつて間違つてないもん！

もういいっちゃ

シヨウタロウ

ケンジ あ、ごめん

シヨウタロウ もういいっちゃ、お前はそれで遊びよき

ケンジ みんなで試験飛行をしようや

フトシ え

ケンジ 試験飛行、本番で墜落したらまずいやん、だから皆で練習するんよ

シヨウタロウ 本番とかないやろっちゃ

ケンジ ないけど：いやならいいし、一人で遊ぶけ

ツヨシ あいつらに勝てるかね

四人、空を見上げる

ケンジ 勝てる勝てる

シヨウタロウ かつけえ

ケンジ おい

フトシ 日本のもああいう形にすればいいのに

シヨウタロウ マネしてもかつこよくならんよ

フトシ まあそうやけど：今日は少ないほうやね

シヨウタロウ そうかね、小さいのが多いだけやん

フトシ そうやね、ハエみたいやね

シヨウタロウ 本当やん、ハエやん、羽音ならして飛びよるとこまで同じやん

ツヨシ プーン

フトシ ハエヤン

ケンジ ハエとか絶対勝てるよ、やけやろうや

フトシ どうやるん

ケンジ おお、練習とは言えどこいつにはどうせなら高いところから飛んで

もらいたい

ツヨシ ふんふん

ケンジ そこでだ、みんなには大きな岩を集めてきてもらって

フトシ ふんふん

ケンジ それを重ねて発射台を作るんだ

シヨウタロウ、フトシ なるほど

ケンジ そしてその上に立って飛行機を飛ばす

シヨウタロウ、フトシ おおー、おお、お…

遠くから小さな爆発音

フトシ じゃあ後からやね

ケンジ 今出来んかね

フトシ できるわけないやん、立つのがやっとなのに

ケンジ そうやなくって、あそこの広場で

フトシ え

ツヨシ 危なくないかね

ケンジ 危なくないちゃ、高いつて言ったってそんな高くないんやけ

フトシ そうやなくて、今、出たら

ツヨシ 落ちたら怪我するよ

フトシ は

シヨウタロウ まあでもちよつと危ないかも

フトシ なんいいよん皆

ケンジ 危なくないし、そんなに怖いんやったらどつか遠くで見よき

ツヨシ 僕、遠くで見よく

シヨウタロウ 僕も

ケンジ フトシ、どうする？

フトシ え、僕はここからでらんよ

大きな爆発音

ケンジ うわあ、あぶない

間

フトシ やめようや、みんな

間

フトシ以外みんな泣き出す

フトシ

ごめんごめん、またみんなでしようや、ケンジが発射台に立って：  
みんなで岩も探そう、うんと高いところから飛ばそうや、ねえ、だつ  
てあいつらに勝たないけんのやけ、おい、おーい、ハエー、ハエー、  
プーン

ケンジ

うん、うううう

フトシ

うん、うんうん

ケンジ

ううううう

フトシ

ケンジ

ケンジ

うううう

フトシ

ねえ、もういい加減、泣き止んでよ

シヨウタロウ

うううう

フトシ

ねえっちゃ

ツヨシ

いいよ、気が済むまで泣きよったら

フトシ

そうやけど、恥ずかしいやん、そうや、皆で行ったコンサートの時

みたいや

ツヨシ

二人ともはじまって最初の曲でもう泣きよったよね

フトシ

今でも覚えとるよ、なんやっただけ、あの曲が流れたとき

シヨウタロウ

水がはじけるような音がしたんよ、それで音楽でこんなことができ  
るんやって思ってたそれから涙が止まらんかった

ケンジ 美しく青きドナウの最初のホルンは最高やけね

フトシ ああ、それそれ、美しく青きドナウ

シヨウタロウ ううう、よかったな、美しく青きドナウ

ケンジ よかった、最高の出会い、美しく青きドナウ

フトシ 何回言うん

ツヨシ いいやんいいやん

ケンジ 初めて見る楽器ばかりやったよね

シヨウタロウ 茶色いのばかりやった

ケンジ 初めて聴く音ばかりやったよね

シヨウタロウ そうやねえ、クラシックコンサートって言われてもなんするんかよ

うわからなかったし

それがあんな

ケンジ あんな、もう、な

シヨウタロウ あんな笛のさ、音がもう、耳にこう、な

ケンジ 耳に、こうきたかと思えば全然きてなくて、いや、聞こえとるんや

シヨウタロウ けど、耳で聞きよる感覚やないっちゆうか

でも耳しびれたよね

ケンジ そうなんよ、それが、な

ケンジ あんな、もう、な

シヨウタロウ もう、ちよつと、これは、な

フトシ なに

ケンジ・シヨウタロウ 言葉じゃ言い表せん

ツヨシ あはは

フトシ せつかく勝山公園行ったのに遊ばんで帰ったもんね、二人とも

ケンジ なにが

シヨウタロウ ダメなん

ケンジ 別にいつでもできるやん

フトシ いつでもはできんよ

シヨウタロウ 広いってことぐらいしかやる理由がない

フトシ 最高の理由やん

ケンジ また行こうや演奏会

シヨウタロウ うん、絶対行こう

フトシ その曲しか知らんくせに

シヨウタロウ その曲が聴けたらいいもん、美しく青きドナウ

フトシ それせんかもよ

ケンジ するし、あれはねシユトラウスの代表曲なんやけんね、絶対するん

よ

フトシ シユトラウスつちなん、恐竜？

ケンジ ちがうちゃ、その、美しき青きドナウの：タイトル決めた人

フトシ へー

シヨウタロウ ちがうよ、作った人よ

ケンジ あ、そうや

シヨウタロウ  
フトシ  
シヨウタロウ  
フトシ  
シヨウタロウ  
ケンジ

シユトラウスはね、ワルツが得意なんよ  
なんワルツっち、悪いん？  
音楽の種類！  
でもワルツ、悪そう  
ワルツいいし、最高よ  
最高やったね

爆発音

ケンジ  
ツヨシ  
ケンジ  
ツヨシ  
フトシ  
シヨウタロウ  
フトシ  
ツヨシ  
ケンジ

生きとる間にもう一回は行きたいな  
いまやろうや  
は、なんを  
ほら、皆で行ったやん  
松田楽器店やろ  
ああ、行った行った、地下まで降りていったら大きいピアノと全部  
白髪の後藤先生がおってさ  
入るまでは僕達以外、みんなおばさんやったらどうしよう、なんならお母さんおったらどうしよう、とか思ひよったね  
後藤先生が教えてくれた歌があったやん、歌おうや  
は、今、僕が言ったのはもう一回コンサート行きたいなって言った  
んよ、ここで皆で歌ったって

ツヨシ  
ケンジ  
コンサートやん、皆で歌ったらコンサートやん  
違うやん、コンサートはこう楽器がいっぱいあって、で、全部茶色

シヨウタロウ

ケンジ  
全部茶色やん  
焦げとるけやろ

ツヨシ  
それでいいやん、歌おうや

フトシ  
歌おう

シヨウタロウ  
何歌う

フトシ  
どんなん教えてもらったつけ

シヨウタロウ  
教えてもらったのとかもう覚えてない

フトシ  
そうやね、じゃあ学校で習ったのでいいか

ツヨシ  
学校で習ったの？われは海の子とか？

シヨウタロウ  
あんなんいいや、もつとシユトラウスみたいな、涙の出る奴

フトシ  
僕、涙出てないもん

シヨウタロウ  
なあ、ケンジ、そういう歌がいいよな

ケンジ  
俺は嫌だ、そんな気分やない

シヨウタロウ  
なんが？

ケンジ  
暗い気持ちで歌う曲とかなないもん、歌は明るいきいんやん

シヨウタロウ  
まあ、そうやね

ツヨシ  
え、じゃあさ、歌ったら明るい気持ちになれればいいんやない

フトシ  
え

ツヨシ おまけに涙も出るよ、笑いすぎて、あははは

シヨウタロウ そんな歌ないやん

ツヨシ あるよ

爆発音

ツヨシ以外の三人 うわ！

ツヨシ、鹿児島おはら節の調子で替え歌し歌う

ツヨシ 見えた見えたよ、湯船の中で

丸く浮かんだ オハラハラ

屁が見えた

ハ、ヨイヨイ、ヨイヤサツ

皆、笑う

皆で歌いだす

全員

かわいそうなはずボンのおなら

右と左に オハラハー

泣き別れ

ハ、ヨイヨイ、ヨイヤサッ

皆、笑う

フトシ

もうダメや

シヨウタロウ

これ俺が考えたところが一番おもしろいやろ、右や左に泣き別れって

フトシ

そこ、みんなで考えんかったっけ

シヨウタロウ

違うよ、俺が考えたんよ

ツヨシ

誰でもいいやん、あはは

ケンジ

・・・なんでお前らそんなバカなんかちや

フトシ

ケンジこそなんでそんな怖い顔しとん、バカやん

ケンジ

バカやない

ツヨシ

ケンジはね、バカよ

フトシ

俺もね、バカよ

ツヨシ

シヨウタロウはもつとバカ

シヨウタロウ

バカやないし、天才よ、俺が考えたんやけ、鹿児島おなら音頭

皆、笑う

ケンジ

もう誰でもいいし、あははは

ツヨシ

あ、戦争勝てるかも

フトシ  
なんいいよん、負けるわけないし  
飛行機もおらんくなつとる  
シヨウタロウ  
いっばい通りよつた車も減つたね  
ツヨシ  
うん、出ようや、もうすぐ  
フトシ  
うん、あそこにとまつとるトラックが行ったら出よう  
シヨウタロウ

間

フトシ  
見たことのないトラックやね、あんな大きいの  
シヨウタロウ  
上に積んどるのは材木、かね、真つ黒や  
ツヨシ  
材木かね  
フトシ  
あ、トラックが行く、よかつたし、やつとでれるね  
シヨウタロウ  
あ、ひとつおちたよ、材木、僕みてるね  
フトシ  
危ないよ  
シヨウタロウ  
大丈夫つて  
フトシ  
おい

シヨウタロウ、固まる

フトシ  
どうしたん  
ケンジ  
火傷した？

シヨウタロウ  
ケンジ

火傷どころやない  
は

全員、防空壕から出て

シヨウタロウ

こんなん火傷つちいわんやろ

フトシ

どうしたんシヨウタロウ、怪我したと？

シヨウタロウ

俺やない、これよ

フトシ

黒こげの材木がどうしたん

シヨウタロウ

これ人や、焼け焦げた死体や

フトシ

え

ケンジ

なんいいよん、そんなわけないやん

シヨウタロウ

近づいて見たらわかる、真つ黒こげでなんもわからんけどうつつら

顔みたいになつとる

ケンジ

そういう材木やろ

シヨウタロウ

違う、よく見たら指だつてついとる、ここがお腹で、男の人やこの

人

フトシ

じゃあ、さっきのトラックは

ケンジ

ここにも爆弾が落ちたら、うわあああ

シヨウタロウ

うわああ

フトシ

ケンジ、シヨウタロウ、あぶないよ！

ケンジ

僕らもこんな真つ黒焦げになって死ぬんや、材木が見分けもつかなくなつて死ぬ、うちのおばあちゃんは病気で体中真つ赤になつて死んだんよ、それ見たとき、こんな風に死にたくないっち思つたけど、それの方がよっぽどマシや、あんな風に材木みたいに積まれてトラックで運ばれて、どんな顔で死んでも意味ないやん、クラシックコンサートの日のことも模型飛行機買つてもらつた日のことも、全部わかるように死にたいのに、誰も僕をわからんままで死ぬんや、みんなこんなに違うのに同じになつて見分けつかんで、でもみんなそれをあきらめて死ぬんよ、それなら今でも明日でも、100年後でも同じやん、戦争で燃えて死んでも、溺れて死んでも、病気で死んでも、僕がわからんで死ぬ人もおるのに僕のことわかっとる人まで、わからん顔して死ぬんやったら、今死んだつて同じや

ケンジ、なんいいよん、なんいいよん、なんいいよんかちや、ケンジ！シヨウタロウ！

フトシ

雷鳴

ケンジ、シヨウタロウいなくなる

爆発音、大雨の音

小倉の話

作 穴迫信一

【登場人物】

イワサキ  
フジエ

二人とも場面ごとに年齢が30代、50代、80代となる

イワサキの店、いつかの早朝

調理場で作業中のイワサキ

フジエ、少し慌てたように現れる

フジエ

イワサキさん、もうあいとるかね

イワサキ

あらフジエさん、どうしたんねこんな朝から、まだ仕込み中よ

フジエ

チンピラよ

イワサキ

は

フジエ

ここ座っとなつていいやろか、いいやろね

とカウンターに座る

イワサキ  
あーいいいいよ、どこでもすわっとつていいけど、チンピラって：

などと言いながらイワサキ、調理場の奥へ

フジエ  
いやあ、大変やったんよ、イワサキさん、イワサキさん！

イワサキ  
あーはいはい、なんね

フジエ  
チンピラから逃げてきたんよ、かくまっとつてちよつとでいいけ  
は、なんいよんね、そんなあんた補導員もしよるのに、  
逃げんでもええんやろ

フジエ  
イワサキ  
それがなかようやとつたんやけどね、なかようしすぎた  
なんがね

フジエ  
イワサキさん、ダンスホールつちわかるね

イワサキ  
ああ、聞いた事はあるよ、どんなにかちゃんとは知らんけど

フジエ  
あのねイワサキさん、小倉なんてダンスホールだらけよ

イワサキ  
やけダンスするところやろ

フジエ  
イワサキさん、聴き、これからはダンスホール、キャバレーの時代ぞ、  
最近レッドシューズの生徒さんも増えてきよるんよ、どんどん

イワサキ  
ああ、フジエさんところね

フジエ  
わしのところだけやないよ、三萩野のシスコ、やワルツ教えよる、かさ

イワサキ

フジエ

まつも含めてここらへんにある6件ぐらいどこも繁盛しとるんよ  
へえ、で、そこでなんかあったんね

イワサキ

フジエ

イワサキ

いやその帰りよ、ダンスホールでは教えるのがメインやけど自分はあまり気持ちよく踊れんよ、やけいっつもダンスホールで生徒さんに教えた後はキャバレーいくんよ、キャバレーはさすがにしつとるやろ  
ああ、キャバレーはええとこやねえ  
可愛いお姉ちゃんいっぱいやしな  
久しく行つとらんな：

イワサキ、そのまま考え込むように野菜を切っている

フジエ

イワサキ

わしらはああゆうところにも見回りにもいくんよ、青少年育成のために  
はい

フジエ

イワサキ

子供によく文化の応酬やからね  
はいはい

フジエ

そしたら絶対おるんよ、チンピラが、そんだったらそいつ、わしらにちこつと頭下げてどっか行つたつと思つたら、頼んでもない酒がどんどん出てくると

イワサキ

フジエ

イワサキ

ああ、口止め料かい  
それがなんと口止め料なんよ  
うん、今言つたよ

フジエ

イワサキさん、聞きよると？

イワサキ

聞きよるよ、そんで

フジエ

そんで、わしら見ての通りチンピラですけれど、なんにも悪い事はしませんけん、どうか見過ごしてくださいな、酒でも飲んでくださいいな、なんよ

イワサキ

ええなあ、ただ酒やる

そういうと、また調理場の奥へ

フジエ

そうなんよ、わしもそう思いよったんよ、まあそのときは仕事をやったけ一滴も飲んでらんけどね、イワサキさん！

イワサキ

あーはいはい、しゃべりよって、ここからでも聞こえるけ、そんで、なんで今日は逃げてきたんね

フジエ

今日は仕事やなくてね、遊びにいったんよ、その、ダンスホール帰りのキャバレーに

イワサキ

そしたら

フジエ

そしたら案の定またチンピラおって、でもうわしも顔覚えられとうけ、またちこつと頭下げられて、ビールから焼酎からわんわんでできてさいいやないね

イワサキ

フジエ

そしたらね、わしも楽しくなってきたけね、その若いチンピラあごで使って酒もってこさせよったんよ、もうそれは何十杯も、そしたらも

うたまらんくなってきたね、楽しくてよ、それで気づいたらそのチンピラの頭、バシバシ叩きながら酒飲みよったんよ、さすがに若いのもきれてさ

イワサキ、戻ってくる

イワサキ

フジエさん、あんたが悪い

フジエ

そうなんよ、やけ謝ったんよ、謝りながら逃げてきたんよ、意味なかったけど、もう補導員も退職やなあ

イワサキ

はっはっは、またすぐ仕事見つかるやろ

フジエ

そうやとええな、イワサキさん、酢豚

イワサキ

まだ仕込み中よ

フジエ

仕込み

イワサキ

さつき言ったやないね、野菜切って、出汁作って、ご飯炊いてってまだ準備の時間なんよ、酢豚やったらそれこそ今から豚肉買ってこない

かん

フジエ

へー、イワサキさん、それ毎日やりよると、すごいねえ

イワサキ

そうかね

フジエ

いやあ、そうよ、毎日おんなじ時間におんなじこと出来んよ、なかなか

イワサキ

フジエさんだつてそうやろ、それにダンスなんかだつて大体うちの店ぐらいの大きさやろ、おんなじ客商売やし、何も変わらんよ

フジエ

ダンスホールの方がせまい、ずっとせまいよ

イワサキ

そうやったかね

フジエ

人がうじゃうじゃおるんやけ、一番多い時は本当動けたもんやないんよ

イワサキ

：まあ、それでも：まあ、そうやね

フジエ

そうよ、イワサキさん、イワサキさんの店は広い、小倉より広いんやないか

イワサキ

どういう意味ね

フジエ

はははは、じゃあまたくるけ

フジエ、店を出る

イワサキ、フジエの背中を目で追いブツブツと

イワサキ

あの人はうちがそこそこ繁盛しとることを知らん

イワサキ、歌いだす

イワサキ

ただ酒くただ酒く、ダンス、ダンス、なんやったかね、ダンスフー、ダンスフー、ヒー、ダンスなんか、ええねえ

イワサキの店、いつかの夜8時頃

フジエ

イワサキさん、まだあいとるかね！

イワサキ

フジエさん、ああ今から閉めるところよ、どうしたんね

フジエ：カウンターに座る

フジエ

ここ座っていいやろね

イワサキ

いいよいいよ、どうしたんね

イワサキ、外にある看板の電源を切りにいく

フジエ

いやあ、大変やったんよ、イワサキさん、イワサキさん！

少し遠くから声が聞こえる

イワサキ

はいはい、どうせまたチンピラに追われた話やないんね

フジエ

違うんよ、すごいんよ、イワサキさん

イワサキ

どうしたんね

フジエ

水戸黄門にでてきた

イワサキ

は？

イワサキ、戻ってくる

フジエ

そうなんよ、すごいやろ

イワサキ

なんをいよんね、え、水戸黄門にでてきた？

でてきたのつてのはフジエさんが水戸黄門に出たんね

フジエ

そうよ、森繁久ヤの前で叩いてきたんよ

イワサキ

あ、太鼓ね

フジエ

そうよ、太鼓よ、

イワサキ

はあ、本当ね

フジエ

何週間前かにね台本が送られてきてね、それを覚えて来いって言われ

たんよ

イワサキ

それ俳優の仕事やないね、

フジエ

そうよ、あれあ、ようできんね、プロはすごいんやねえやっぱり、休

憩中もみんなずっと台本みよったよ、

イワサキ

フジエさんはセリフいえたんね

フジエ

それとこの前はね、三船敏郎にも会ったんよ

イワサキ

フジエさんがかね

フジエ

そうよ、無法松でよ、三船敏郎に太鼓教えてきたんよ、そりゃあ本場

のもの叩いてもらわないかんけずとつきつきりて教えよったんよ

イワサキ

すごい話ばかりやね、フジエさん

フジエ

それで本番、カメラが回ってね、そらやっぱ緊張したけど、こっちは大舞台の太鼓もいろいろ経験しとるけんね、バッチシよ

イワサキ

三船さんは？

フジエ

やっぱプロはすごいねえ、練習ではいまいちやったんやけどカメラが回ったら一発成功、いい音やったよ

イワサキ

ほお

フジエ

あらあ綺麗にど真ん中たたけな良い音でらんのやけどね、やけ最近のみようみまねでたたきよるやつらは全然本当の音出でないよ

イワサキ

へえ、みんな上手やけどね

フジエ

とん

イワサキ

え

フジエ

とん、とんってあいつら

イワサキ

え、ああ

フジエ

どん

イワサキ

おお

フジエ

どんだん、どんだんどんだん、三船敏郎

イワサキ

ああ

イワサキ、各テーブルの醤油瓶を集めだす

フジエ　まあスターっちゅうのは、ああいうのをいうんやろうねえ

イワサキ　そうなんかねえ

フジエ　それで今日帰ってきたと、いやあやっぱり手に職つけとくもんやねえ、

お給料ももううて美人な女優さんも生で見ってきたんよ

イワサキ　へえ

フジエ　いやあよかった、ねえイワサキさん、ビール

イワサキ　：あ、ああ、はいはい

フジエ　おごっちゃるけイワサキさん、とりあえず乾杯しようや

イワサキ　わたしはいつまで続けようかね、この店

フジエ　へ、なんいよんね、ずっと続けてよ、繁盛しよるんやろ

イワサキ　うん、お客さんはいっぱいきてくれるんよ、本当に朝から晩まで大忙

しですよ、おかげさまで

フジエ　ならいいやないね、ご近所さんが静かになるのはわしも悲しいけね

イワサキ　：まあ、そうやねえ

イワサキ、醤油瓶を洗うため調理場に戻ろうとする

フジエ　ビール、自分でとろうか

イワサキ　あ、ごめんごめん、とってくる、まっとなって

フジエ、店を出る

イワサキ

はい、おまたせ、あれ、フジエさん、フジエさん、はあ、かんぱーい

イワサキの店、もう営業していない日のいつか

なぜか店の前にぼつり座っているイワサキ、その横にボロボロのスクーター

フラフラと見えるがちゃんと歩いてきているフジエ

フジエ

イワサキさん、あいとるかね

イワサキ

なんいよんね、しつとるやろ

フジエ

ああ、もう40年来やけね

イワサキ

そんなに立つかね

フジエ

なんね、そのスクーター、えらいボロボロやね、乗ってきたと？

イワサキ

いんや、押してきたよ

フジエ

ああ、そうよねえ

イワサキ

昔、使いよったもんでねえ、今は倉庫になおしこんどって、触っても

なかつたけど、久しぶりに引っ張り出したんよ

フジエ

…：…なんで

イワサキ、スクーターを見つめながらゆつくり話し出す

イワサキ

フジエさんは、まだ太鼓しよう？

フジエ

ええ、もちろんですよ、5歳の頃に始めてからずっとやけ

もう60年以上やね、今も竜巳会で子供達に教えよるんよ

イワサキ

おお、まだ子供たちは来よるですか

フジエ

ええ、来ますよ

二人

昔に比べたら：

イワサキ、ゆずる

フジエ

はは、昔に比べたらえらく少なくなつたけどね、それでもまだ続ける

意義は感じておりますよ、ただでさえ最近の小倉は活気が減つたんや

からね、その少ない子供達育てて、ちゃんと祇園祭はせないかん

イワサキ

はいはい、そうですか

フジエ

イワサキさんも叩けばいいのに

イワサキ

ああ、私は、もう体もうごかんし

フジエ

そんなことないよ、イワサキさんもおいで、コレットの地下で子供達

に教えよるけねえ、

イワサキ

いやあ私は

フジエ

なあに簡単よ、たったの二種類覚えるだけ、ドロとカン、ドロはずつ

とたたきつづけるんよ、カンは休みながら叩く

イワサキ

ああ、そうね、じゃあ休みながら叩く方がいいかね、もうわたしには

出来んよ、ずっとは

フジエ カンの方が難しいんよ、イワサキさん

イワサキ ああ、そうなんかね、でも、わしはフジエさんみたいにずっとは

フジエ わし？

イワサキ フジエさんはドロやね、ずっと叩き続けてきたんやから、一日も休ま  
んで、ずっと変わらんで

フジエ なんいいよんね、わしは変わったやないね仕事もいっばい、一日も休  
まなかったのはイワサキさんの方やろ

イワサキ : :じゃあどっちがいいんかね

フジエ どっちがいいとかはないんよ、どっちも祇園太鼓なんやけ

イワサキ : (なにか飲み込み) そうかね

フジエ お店やめてどれぐらい経つかね

イワサキ うん

フジエ 寂しくなったねえ、ここがのうなって、わしは本当は続けてほしかつ

イワサキ たんよ、イワサキさんに

イワサキ ああ、ありがとう、家内が亡くなって、それからやからね、それでも  
う、人手もたりんしねえ

フジエ ああ、そうやねえ

イワサキ はい

フジエ わしはまだまだ現役ですよ、威勢よく店の前でやっておりますけんイワ  
サキさんも買いに来てください、安くしときますよ

イワサキ  
フジエ

フジエさんはいろいろしよったねえ

私はね、そりゃあいろいろやりましたよ、給料がいいもんに飛びついてね、で一番長かったのは今のコレットの所にね、米町公園ってあるでしょ、その前に折箱店があつてね、あつたでしょ

イワサキ  
フジエ

いやあ、しらん

あつたんですよ、そこでね湖月の栗饅頭とかね、20個いりとか30個いりとかいってね作りよつたんですよ、そこが一番長いかね、そんなら箱つくるためにカンナがけしたりとかしよつたからね、それで今の刃物屋さん始めたんですよ

イワサキ  
フジエ  
イワサキ  
フジエ  
イワサキ  
フジエ

ずつと繁盛しよつてええねえ

イワサキさんのお店だつてずつと繁盛しよつたやないね

どうやつたでしょうね

ずつと繁盛しよつたですよ

はい、そうかもしれんねえ

まあ小倉に閑しちやもう知らん事はないね、わたしらはもうずつと小倉なんやけね

イワサキ

いやいや、わたしはまだまだ

フジエ

変わつていくのは寂しいね、やっぱり

イワサキ

そうですね

フジエ

街の名前も変わつていくんですよ、昔は浅野の手前を博労町つていいよつたでしょう、いいよつたですよ

イワサキ

いや、しらん

フジエ

いいよったんですよ、牛を売り買いするところなんやけどもね

イワサキ

へえ

フジエ

名前も変わっていくし、活気ももうないね、昔ほど、何でも変わって  
いくんですよ、そう思いませんかイワサキさん、ねえ、イワサキさん  
あんたはかわらずつと元気やないね、ええねえ

イワサキ

え、わたしかね

フジエ

イワサキ

そうよ、フジエさん、やつぱりドロはあんたよ、あんたみたいになり  
たかったんよ、太鼓やってみようかねえ、ははは

フジエ

どうしたんね、イワサキさん

イワサキ

フジエさん、このスクーターはね、わたしと一緒に世界を旅したスクー  
ターなんよ

時が止まったような沈黙、フジエには聞こえていない、

イワサキの心の声だったのかもしれない

フジエ

：ははは、わたしかね、そうやねえ、じゃあそうかもしれんですねえ、  
ドロかもねえ

イワサキ

立派やねえ

八幡へ帰る

作 塩津順子

【登場人物】

能美

松山良枝

1958（昭和33）年、東京駅。午前11時ごろ。

ボストンバックなどを抱えて、いかにも里帰りのような雰囲気  
の能美が立っている。

時計を見たり、人ごみをじっとみたりしている。人を待っているよう  
だ。

とてもそわそわしている。

そこへ、反対方向から女性（松山良枝）がやってくる。

松山

能美くん！能美くん！

能美、気がつく。

能美

あつ、

松山

ごめん、遅くなって。待ったでしょう。

能美

いやあー、そんなに待ってないよ、ほんと、はは、

松山

ふふ。

能美

いや、それよりね、ほんと、来てくれて、ありがとう。

松山

そんな。

能美

昨日、突然電話して悪かったね。迷惑じゃなかった？

松山

ううん。今日はレッスンは午後からだから。

能美

そうかそうか、いやー、でも、ほんとに来てくれるとは思わなかったよ。

松山

だって、これからもう、なかなか会えないでしょう。

能美

ま、まあね。

松山

あれ？吉田くんとか、伊藤くんは？

能美

ああ、もうね、あいつらとは散々飲んだから、いいのいいの。

松山

俺たちのこと忘れんなよー、とか、伊藤とか号泣で。

能美

まあ、酒の勢いもあつたけどね、はは。

松山

ふふ。

能美

でも、いい奴らだったなー、ほんとに。

松山

いやね、僕は友達はその多い方じゃないけどね、

能美

でも、財産だね。腹を割って、バカな話をできる友達というのは。

松山

やたら友達がいるより、たった一人でも、深い付き合いができるといいんだなって・・・

松山

ふふふふ。

能美

ん？どうしたの？

松山

語るねえ。

能美

まあ、はは、いや、

能美、少し照れる。

松山

能美くんさー、作曲の課題が出たら、何回も先生のところに行ってたよね。

能美

「能美くん熱い！！」ってさ、よく友達と噂してたよ。

松山

え、そうだったの？

能美

うん。

松山

えー、恥ずかしいなあー。

能美

うん、あ、まあ1年の時だけだね。

松山

あー、あの時はもう、燃えてたからね。

能美

ふふ、でも能美くんが学校辞めるなんて、意外だわ。

松山

能美くん、先生から留学しないかとか、お話あったんじゃないかな？

能美

いや、でもね、やっぱり、故郷にね・・・

能美、遠くを見る。

能美

姉がいるんだけどね、今度、結婚するんだ。あと、妹も弟もいるし、

僕ばかり音楽でお金をかけさせられないだろうからね。

松山

そう……。

能美

あ、そうだ、これ。

能美、ポケットから、紙を取り出す。

そこには能美の実家の住所が書かれている。

能美

僕の、住所。

松山

ここが、ご実家？

能美

そう。

松山

ああ、ほんとね。福岡県……八幡市？

能美

うん。あの、よければ……松山さんの住所も、今、教えてくれないかな。

松山

え、うん、いいわよ。あ、時間、大丈夫？

能美、時計を見る。

能美

あ、うん、まだ、大丈夫。

松山

そう、なら。

能美

あ、これに。

松山

うん。

能美、小さなノートを差し出す。

松山、住所を書く。

松山 私は実家、こっちななの。東京。

能美 ああ、そうなんだ。

松山 能美君って、遠い所から来たのね。

能美 うん、まあ、そうだね。

松山 そういえば、能美君、結構訛ってたもんね。

能美 あ、ああ。

松山 『でたんうめえー』とか、よく言ってなかった？

能美 ああー、言ってた、言ってた。

松山 『昨日オムライス食べたっちゃー』とか。

能美 はは。

松山 『松山さんも、今度あそこの店で食べりいー』とか。

能美 よく覚えてるなあ。

松山 覚えてるよー。強烈だったから。

能美 恥ずかしいなあー

松山 なんで訛り取れちゃったの？

能美 まあ、東京に2年もいたら、こっちの言葉になるよ。

松山 そうよね。でももつと聞きたかった。

能美

はは、松山さんも、遊びにおいでよ。

松山

東京に負けないぐらい、栄えてるから。

能美

ほんとに？

松山

そうさ。炭鉱や、製鐵がすごいんだよ。

能美

電車を見たらわかるよ、よく貨物列車が通っているから。

松山

まあ、そうなのね。

能美

そうだな、あと、鶴屋の八幡饅頭って知ってる？

松山

ううん、知らない。

能美

すごくおいしいよ。来た時は、本店に案内するよ。

松山

うん、行くときは手紙を出すわ。．．．はい、どうぞ。

松山、ノートを能美に返す。

能美

ああ、ありがとう。

松山

向こうでは働くの？

能美

そうだね、まあ、八幡の方は、働きどころ、いっぱいあるみたいだから、

松山

まあ大丈夫さ。

能美

ああ、炭鉱とか、製鐵？

松山

そうそう。

松山

音楽から、急に炭鉱？

能美

音楽も炭鉱も、そんなに違わないよ。僕はなんにでも打ち込める方さ。そう、僕、戦争中は、僕もガラス管の工作もしてたんだよ。

松山

あら、そうなの。そんな才能もあるのね。

能美

いや、まあ、ちよつとかじつてた程度だけどね。

松山

帰っても音楽しないの？

能美

いや、コンサートなんかは観に行くよ。

松山

自分で作ったりとかしないの？

能美

いや、もう、いいんだ。僕は、味わう側がいいんだよ。

松山

そう・・・もつたいないわ。

能美

君のピアノの音色も、もつと、味わいたかった。

松山

・・・

能美

第4音楽室、静かな夕暮れ、どこからともなく聞こえてくる青い音色。それは松山さんのピアノだった。

能美、浸る。

能美

僕は、松山さんのピアノが聞こえてくると、いつも吸い寄せられたよ。

松山

ほんとはさ、僕が作曲した曲を、松山さんにも弾いてもらいたかった。あら、楽譜、くれたらよかったのに。

能美

いやいや、とても恐れ多くてできなかったよ。

松山

そんな。私、能美くんが作った曲、弾いてみたかったわ。

能美

え、

松山

戸田くんって知ってる？

能美

ああ、戸田くんね、あの指揮してた人だっけ？

松山

そう。彼も褒めてたわ、能美くんの曲。

リストのようでもあり、シューベルトのようでもある。

かと思えばショパンの甘さも混じっていて、

急にバッハの荘厳さが顔を出す。なんかいろいろすごいって言った。

はは、そうか、戸田くんが・・・はは、嬉しいな。

帰っても、作曲続けなよ。

松山

・・・いや、僕は、音楽をやめる覚悟で来たんだ。

能美

そうなの？

松山

うん。持つてるレコードだって、全部捨てたよ。

能美

え？ いっぱいあったんじゃないの？

松山

僕は、わかったんだ、東京に来て。僕は、音楽を、続けられないって。

松山

そう・・・。

松山、時計をちらりと見る。

松山

能美くん、時間、もう、

能美

え？

松山

ほら、22分発じゃなかったの？

能美、時計を見る。

時計は、20分を指している。

能美

ああ、ああー、しまった！

松山

うん、そろそろ行ったほうが。

能美

あ、そうだね、うん。

松山

じゃあ、向こういつても、元気でね。

能美

うん、松山さんこそ、ね。音色をますます磨いてくれ。

松山

うん。頑張るわ。

能美

じゃあ。元気で。

松山

能美くんこそ。

能美、駅の改札へ進む。

松山、その後姿を見つめる。

松山、去りゆく能美に、突然声をかける。

松山

能美くん、

能美

えっ？

電車のベルがなる。

松山  
能美  
松山  
能美

あつ、  
なに？  
元気だね！  
松山さんも、元気だね！

能美、改札へと走り去る。  
松山、手を大きく振り続ける。

父と歩く

作 塩津順子

【登場人物】

大庭卓朗（17歳） 高校2年生

父（54歳）

昭和30（1955）年5月。夕方。

田植えの後。卓朗と父だけ残っている。

他の田植えをしていたメンバーは皆帰ってしまっている。

卓朗は片づけをしていて、父は田んぼの傍らで座って待っている。

卓朗

父ちゃん、終わったよ、帰ろうや。

父 おう。

卓朗が、田植えの時に引く縄や、苗の入っていた箱を持って、父のもとへ駆け寄る。

父 俺も持つか。

卓朗 いいよ、俺ひとりで持てるけ。

父 そうか。

卓朗 先に帰つとつてもよかったのに。

父 いや、なんとなくな。

卓朗 まだ体、よくないんやないと？

父 まあ…、でも今日は、よかったぞ。

卓朗 ならいいけど。

父 たまには俺も手伝わんと。

二人、歩き出す。

父 今日はよう晴れとつてよかったな。

卓朗 やねえ。おかげで捗ったわ。

父 あのー、あの人、漁師の奥さん、

卓朗 大谷さん？

父 そう、大谷さん。あの方は手際がええなあ。

卓朗 うん。母ちゃんと同じくらい早かったね。

父 しかし結構ザクザクやったな、列は。

卓朗 うん。

父 やっぱり作業ひとつとっても、性格っちゅうんがな、出るよな。

卓朗

そうそう。

父

卓朗も早くなったな。田植え。

卓朗

そりゃあ、昔よりはね。でもやっぱり母ちゃんと大谷さんには敵わん。

父

でも丁寧さは大谷さんよりあったぞ。

卓朗

そうかなあ。

父、腰を抑える。

父

はあ、腰がたまらんない。

卓朗

大丈夫？

父

今日ちよつと田植えしただけで腰がやられたわ。

卓朗

家帰ったら、俺が揉むよ。

父

おう、お願いな。

卓朗

うん。

ふと会話が途切れる。

父

卓朗、学校はどうや。

卓朗

え、楽しいよ。

父

そうか。悪さばかりしとるんやないか。

卓朗

ちよつとしかしとらんよ。

父 ほんとうにちよつとか？  
卓朗 うん。ビンタ1発もらうくらい。  
父 ころ、先生に迷惑かけるんやないぞ。  
卓朗 わかつとるよ。  
父 しかし、卓朗が若松高校入るとはな。  
卓朗 いつつも言つとるやん、それ。  
父 いや、ついな。  
卓朗 でも俺、若高入つてよかつたー。  
父 そうか。  
卓朗 友達めっちゃできたし。  
父 おう。  
卓朗 俺ね、毎日友達とおかずの交換しとるんよ。  
父 ほお。  
卓朗 やっぱ中学とは、おかずのレベルが違うんよ。  
父 そんなうまいんか、友達の弁当は。  
卓朗 うん。明太子つて知つとる？  
父 おお、めんたいこ！  
卓朗 なんだ、父ちゃん知つとったん。  
父 知つとるけど、もう何十年も食つてないわ。  
卓朗 俺高校で初めて見たよ。あんなおかず。  
父 つぶつぶしとるんやろ。

卓朗 そうそう、あんなん、中学ん時はみたことなかったけ。  
父 そうやな。戦前は俺も食べたかな。  
卓朗 うちでも夕食で出たらしいのに。  
父 そうやな。母ちゃんに言ってみるか。  
卓朗 俺、前に母ちゃんに言ったんよ。  
父 けど、やつぱこっちじゃ売ってないみたいや。  
父 俺もまた食いたいなあ。  
卓朗 ああ、あと鮭も旨かった。  
父 ほおー、やつぱ都会の高校行ってよかったな、洒落とるなあ。  
卓朗 ほんとよ。お昼が毎日楽しみっちゃ。  
父 卓朗は、なんかおかずやるんか。  
卓朗 うん。つけもの。  
父 ばあちゃんのか？  
卓朗 うん。すごい人気なんよ。  
父 まあ、あれはうまいもんなあ。  
卓朗 あと、玉子焼きも人気。  
父 ほうほう。楽しくやつとるなあ。  
卓朗 へへへ。あと、購買のパンもうまいよ。  
父 パンか。いいなあ。  
父 この前、小遣いで、友達にも買ってやったんよ、パン。  
父 ほお。えらいなあ。

卓朗 そのかわり、めんたいこ1個分けてもらったっちゃ。

父 はあ、そうか。ふふふ。

卓朗 俺ね、結構存在感あるんよ。農家の子やけ。

父 そうなんか。

卓朗 体育祭で結構活躍したんよ。

父 ああ、徒競走速かったな。

卓朗 うん、徒競走もやけど、体育祭の準備で、大活躍したんよ。

父 おう。

卓朗 家から、持っていったやん、米。

それ、クラスの女の子が炊いてくれたんよ。

そんでおむすびにしてくれてさ。皆よろこんどったよー。

父 おお、よかったなあ。

父、楽しそうに笑う。

卓朗 どうしたん、父ちゃん。

父 いや、楽しそうにしとってよかった。

卓朗 楽しいよ。

父 最近あんまり卓朗と話とらんかったけ。

卓朗 父ちゃん具合悪そうやったし。

父 若高の、入学式の時、驚いたなあ。

卓朗

なん？

父

毎日こんな坂、上がらんといかんのかって。

卓朗

ああ、きついつちやきついでね。もう慣れたよ。

父

おまえ、速くなつたな、歩くの。

卓朗

え、そう？

父

いや、俺が遅くなつたんかね。

卓朗

わからん。

父

でも、坂のとこの、桜は、綺麗やつたな。

卓朗

うん。父ちゃん卒業式の時に見えるよ。

父

お前、卒業はできるんか。

卓朗

・・・頑張るよ。

父

おう、頼むぜ。

穏やかな追憶

作 藤本瑞樹

【登場人物】

女（80歳） 北九州で生まれ育った

男（80歳） 女の小学校時代の同級生

舞台となるのは小倉井筒屋の最上階にある飲食店。昼。  
年配の女が座っている。

とそこに同じくらいの年齢の男が入ってくる。

女 （男に気付いて） あら、

男 おお、

女 こんにちは。

男 おー、

女 お待ちしましたよ。

男 ……あんただけか？

女 ええ。

男 他には、

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女

今年は私たちだけです。私たち、ふたりだけ。ふたりだけ？

ええ。

そうか、(座る)

ええ。

他のやつは……みんな死んだか。

いえ……、

一昨年は確か他に……全部で10人くらいはおらんかったか。ええ。

あのー、あれや、あのー、去年来とった、あの、

中川さん？

そうやなくて、あのー、ほら、ヒゲの、

ああー、

なんやったかな、

あの、ちよつと身体の具合がよろしくなかった、

そうそう、

男性の、ねえ。

うん。

あの、ねえ？あれでしょう？子どものころ、沼で溺れた、そうそう。

ねえ。顔は出てきてるんですけどねえ。

男 女 男 女      男 女 男 女 男 女      男 女      男 女      男 女 男

うん。あとはあれは来んのか、ヒデとか、……ああ、あれは死んだな。

……そうですか。

今日は井筒屋の上で、場所がなんかこうどンドン、……天の方に近づいていくな。

気のせいですよ。

去年もあの、あれの3階、なんちゆうたかね、なんかあの、変なあれ、変な色した、丸とか三角とかついた……

リバーウオークですか？

あーそうやリバーウオークや。あれの3階か4階か、そのへんやなかったかね。

そうでしたね。

それで今年も井筒屋のいちばん上やろ。

ええ。

そしたら、今度は天国や。わっはっは。

……。

(店員に) あ、すみません、注文をいいかね。私ね、……(女が何も頼んでないのに気付いて) あんたは？何頼む？

え？

飲み物。

あ、じゃあ、……私紅茶で。

じゃあ私はビールを。

女 男 女 男 女      男 女 男 女 男 女 男 女 男 女      男 女 男 女

飲むんですか？

ん？飲むよ？

そうですか。

うん。いいやないねあんだ。こうして、小倉城を見渡して、昼間から、ビール。贅沢や。

そうですね。

それに、リバーウォーク。ね。風情ないねえ。意味がわからん。俺あ好かん。まあ、……。

今年はふたりだけか。

そうですね。

……これが、最後かなあ。

……。

……。

(なにか言おうとする)

(店員に)あ、ごめん、注文ね、ビールと、紅茶ね。……あれ？ なんの話やっ  
たかな。

……さあ。忘れました。

あんだあ、元気しとったかね？

ええ、おかげさまで。

わしゃあもうあれや、最近膝が痛くて。

あら、

男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男

犬の散歩もつらい。

あらー、

まあ、80年も生きとつたらなあ、

ええ、

いろいろガタも来る。

そうですねえ。

歯はね、まだあるけいいけどさ。

私はもう全然。

そうですね。

ええ。

ほいけど、なんかもういろいろ薬飲みよる。

私もですよ。

なんの薬かようわからん。

そうですね。

長生きする薬やないやろうねて、先生に言うたけど。

ええ、

でもこれ飲んだら早よ死にますよて言われても怖いけな。

そうですねえ。

しゃーない。なんの薬かわらんけど飲みよる。

ええ。

もう充分生きてきたんやけどなあ。

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女

そうですね。

……あんたは、楽しかったか？

え？

この、……なんちゅうんかね、……、

……ああ、……ええ。

うん、

楽しかったですよ。

そうか、

あつという間でした。

そうね。

小学校のときから思い出したら、すごく長い感じがしますけどね、

そうやなあ。

一瞬みたいでした。

そうか。

ええ。

あんた、いちばん楽しかったのはいつかね？

そらあ、……学生の頃、女学生るときですかね。

ほう。えらい昔やな。

物とかなんも無くても楽しかった。

戦争しとったからなあ。

男のひとは大変やったかもしれませんが。

女 男

あの頃は大東亜戦争ち言いよったな、友達とふたりでこっそり井筒屋のデパートに行つてね、食事するところに入つたんですけど。ここじゃなくて、八幡の方の井筒屋でしたけどね。

女 男

あんたんとはそんなんしてよかつたんか。

女 男

だめですよ。食事するところに入つたらいかんかったです。

女 男

ああ、

女 男

電車乗つてね、こっそりそういうことするのが楽しかつたんですね。でも、井筒屋着いたら見つかつてねえ、補導員みたいな先生に。校章外しとったのにね。

女 男

おお、

女 男

それで、どこの学校かて訊かれたから、適当な学校の名前言って嘘ついたりして。

女 男

りして。

女 男

あんたそういうこと慣れとつたんか。

女 男

まさか。どきどきですよ。友達と、そういうこと打ち合わせたりもしてな

女 男

かつたから、ふたりとも適当な嘘ついてね。いつバレるかと思いましたが

女 男

ど。

女 男

うん、

女 男

案外バレないもんですねえ。それで、結局なにも食べたりはしなかつたん

女 男

ですけど。ふたりとももうね、緊張して口はカラカラでしたけど、なにか

女 男

食べたっていう気分じゃなくなつて。

女 男

うん、

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女

だからいまだに井筒屋ってね、私にとってはちょっとこう、どきどきする場所なんです。

あー、それで今日、  
そうですよ。

俺あてつきりどんどん天国に近づけよるんかと思いつた。

そんなわけじゃないですか。

しかしあんた戦争中にそういうことしとったんか。

思春期でしたからねえ。……あれは楽しかったですねえ。

そういうことはしょっちゅうしとったんか。

まさか。その一回だけです。でも今でも覚えてるってことは、悪いこと  
したなあつて思ってるんでしょうね。

後悔しとるんか。

後悔、とは違うと思いますけどね。悪いことと思ってるのが楽しかった  
んでしょうね。

そうか。

そういうこと、されませんでした？

俺あ、うん、そうね、うん、……、

されたんでしょう？

俺あもうあれよ、そんなデパートとかそういうんやなくて、ほんと大したことしとらんよ。

こっそりデートとかされなかつたんですか？

男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男

……安川の貯水池でこっそり泳いだ。  
え？

安川の貯水池でこっそり泳いだ。

あら素敵！それは、恋人の方と？  
ひとりで。

……あ、そうですか。

内緒ぞ。

言いませんよ。

もう時効か。

そうですね。

戦争しよったやろ。

ええ。

やけ。

……？

戦争しよったやろ？

はい。

やけさ。

え、ええ。

男はそういうとき、泳ぐんよ。

……そうなんですか？

そうよ。やけあれも沼で泳いだんよ。あの一、名前が出てこん。ヒゲの。

女 男 女 男 女 男 女      男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女

ああー、誰でしたっけ。

とにかくあれとか、俺とか、男はそういうとき泳ぐんよ。

……わかる気がします。

わかるかね。

ええ。

適当言うたんに。

……。

ああとはあれやね、

なんですか？

よう風呂を覗いたね。

えっ。

近所にね、当時のわしらの背格好やったらなんとかして入れる、ほっそい  
なんちゅうんかね、垣根みたいのの隙間があつてね、そこを通るやろ、そ  
したら、ちようどそれが銭湯の女湯のほうにつながつとんよ。

……。

それで、たまによう見たね。

たまになんですかよくなんですか。

よう見たね。

そうですか。

そのときからよ、この、年上の女性が好みになったんは。

あ、そうなんですか。

男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男

うちのかみさんも、あれあ2つ上やけな。

そうなんですな。

年上のかみさんちゃあ珍しいって言われたけど、惚れたもんはしょうがないけなあ。

そうですな。

あらあよくできた女房よ。

あら。

それもこれも、あの頃女風呂覗いとらんかったら惚れんかったかもしれんのやけ、女風呂は覗いとってよかったな。

……そうですか。

うん。

そうですか。

あんたはそんなしとらんのね。するわけないじゃないですか。

そうか。

ええ。

犬とか食べんかったか。

えっ。

みんなで犬とか。

……そんなことしたんですか。

戦争しとったけなあ。

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女

……。

戦争しよったら、犬くらい食べるやろ。

……。

食べたことないけど。

そうなんですな。

食うわけないやん。

一瞬信じましたよ。

うん……うん、そうやな。

ええ。

戦争ちゆうのは、そういうもんやったもんな。

そうでしたね。

あれはいかん。二度としたらいかん。

ええ。

でも、あれやね。この街にも戦争があつたつちゆうのが、俺あたまに信じ

られんことがある。

……そうですな。

山のほうからこう、空爆があつて、どんどん逃げ場がなくなる。あのころは石炭使いよつたけ、石炭に火がついて、そしたら木造の家が燃える。桃園のほうとか全滅や。街が真っ赤に燃えとる。そういうのを学生のころに見とつた。いまでも覚えとる。

そうでしたな。

男

女

男

女

男 女

男 女

死体ちゆうのもあんた、いくつか見たねえ。初めはなんか、木かなんかが燃えとるんかと思つたら、真つ黒に焼け焦げたひとやった。

ええ。

あんたも見たことあるかね。

ええ、

こないだのは結局負けたけど、勝つても負けても、戦争とかしたらいけんね。子どもながらにそう思つたよ。

そうですねえ。

俺あね、戦争終わつたらすぐ、八幡製鉄で、今の新日鉄で働き始めてね、あん頃は、ニオイもすごかった。川も煙も。もう変な色しとつたね。あの頃は柿色ち言いよつた。コーヒーみたいな紅茶みたいな、なんかそんな感じの色や。ああ、これ身体によくないものが入ってきよるんやろなあて、働きながら思いよつた。洗濯物もなかなか干せんくらい汚かつたんやけ。それでももう働いたら稼げた時代やけ、働いてね、家にやれ電気釜や、洗濯機や、冷蔵庫やち、ものがどんどん増えていつてね。白黒テレビも買ったねえ。そうやってどんどん生活が豊かになつて、ええ。

でもだんだんエネルギーが石油に変わつていつたやろ。それで、東田にあるあの「一九〇一」で書いてある溶鉱炉、あれももう40年くらいになるかな、操業せんごとなつてね。そのうち自分が働いとる高炉も停止してね。平成なつてすぐやつたかな。それで仕事辞めた。

男 女 男 女 男 女

ええ。

終わったなあて思ったよ。

終わった、ですか。

うん。何がかはわからんけど。

ええ、

必死で働くやろ。働いたら働いた分だけお金が入るけ、いろんなもん買うやろ。暮らしがどんどんよくなるのがわかるんよ。家の中にものがどんどん増えてね。そのうち要らんもんまで増えてね。家内のダイエットのなんかやら、マッサージのソファアーやら。

うちにもありますよ。使ってないけど。

そうやろ。そういうのが増えてね。で、歳も取って行って、もう欲しいもんとかないなあと思うのと同時に、仕事の方もだんだん細々となつていつて。鉄冷えちゆうやつやな。

ええ。

それで仕事辞めて今80になつてね、振り返ってみたら、なんか、なんちゆうかこう、……うまく言えんけど、夢やった、みたいな気もするんよなあ、今までが。

夢ですか？

うん。

いまも？

いまはこうしてあんたと喋りよるけいいけど、ひとりで今までのこと思い

男 女 男 女

男 女

男 女

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女

出したら、たまにようわからんごとなる。

そうですか。

夢やったんよて言われたら、ああそうですかて思うかもしれん。

……。

なんかこう、……うまく言えんけど。

ええ。

……クラス会に来れるちいうんは、幸せなことかもしれんなあ。

どうしたんですか急に。

うん、うん、いまふつと思うたんよ。

ええ。

毎日が楽しかったなあ。

いいことじゃないですか。

あんたと一緒やな。

そうですね。

楽しかった。楽しかった。けど、気がつけばこんな歳になって、……俺あ

なんが残せたんやろか。

ご家族が、いらっしやるでしょう？

うん……。うん。結婚して、子どもも生まれて大きくなって、そのうち孫もできて。みんな元気しとるよ。孫とか今度いちばーん上のんが結婚するち。やけそのうちひ孫もできるかしらん。

あらあおめでとうございます。……それで充分じゃないですか。

男 女 男 女 男 女      男 女      男 女      男 女 男 女      男 女 男

そうなんやろか。

そうですよ。

でも俺ああんまり子どもたちにかまってやれんかったけなあ。やけかなあ

……あんまり……なにか残せたちゆう気がせんよ。

ご家族が聞いたら悲しみますよ。そんなこと言って。

内緒ぞ。

もう。

なんかね、あの、なんかあるやろいま。男性も子育てをせんとみたいな。

あれね、ちよつとわかるねえ。

そうですか。

もうちよつと子どもたちにかまってやつとつたらなあ。……そのぶん孫を

かわいがりよるけど。

それでいいじゃないですか。

孫も、むかしはかわいかつたんやけどなあ。おじいちゃんおじいちゃんて

言うて。

うちもそうですよ。

ごんぱちもなあ。

え？

え？

なんですか？

ごんぱち。

男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女

なんですかそれ。

うちの孫よ。

お名前ごんばちさんって言うんですね。

あだ名よ。

ああそうですか。

あれ？ ……名前なんて言うたかいな。

……。

なんやったかな……。

ほんとにかわいがつてたんですか？

かわいがつたよー。うちの家系のなかでO型なんはわしとごんばちしかお  
らのやけ。

そうなんですか。

やけ気が合うんよ。

あらあ、そうなんですな。 ……なのに名前忘れたんですか。

うん……。なんやったかな。

……。

やけどもう、2年くらい会ってないな。

そうなんですか。

就職したけねえ。盆も正月もなんか忙しそうや。

そうですか。

あんたのところはどうね。

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女

うちはお正月には会いますよ。でもそれつきり。1年に1回会うだけです  
ね。

まあ大体そんなもんなあ。

……私もね、もう、なに話せばいいかわからないですよ。  
うん。

それでテレビ見てね。なにか、漫才とかやってますでしょう。それ見てね。  
お茶入れたりして、夕方になったらご飯の用意して、

うん。

2日には息子も孫も帰る、みたいなね。

うん。

だから、会ったら会ったで、ね、

うん……、

いま私デイサービスに行ってるんですけどね、

うん、

みんなすごく仲がいいの。

そうね。

普段話す相手が、他にいないから。

……うん、

みんな、お子さんとかお孫さんとか、いらっしやるんですよ？

うん、

でも誰も会いに来ないんですって。

男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男

そうか、

家族のつながりってというのが、変わってきたんでしょね。

そうやなあ。

うちも、子どもとか孫とか、もう一緒に住みたくないって言いますからね。それでも、困ったときには、最後には、血のつながりやないんかなあ。

そう思ってたんですけどね。みんなもう、自分のことで精一杯ですよ。

……。俺ねえ、あんたのこと好きやったんよ。小学校の頃。

ええ？

……内緒ぞ。

は、はあ……。

あれもあんたのこと好きやったんよ。

あれ？

ほら、あの、ヒゲの。

ええ！あの方が？

名前が出てこんのやけど。

ええ……。

あんたモテとったんやなあ。

70年くらい早く言ってくれたらよかったのに。

言えるわけないやん。10歳くらいで。

いまさら聞かされても。

そうやなあ。

女 男 女 男 女 男 女

……でも、楽しいですね、そういうの。  
そうやなあ。

……またみんなで集まりたいですねえ。  
うん……。

……。

……これが、……最後なんかなあ。

(なにか言おうとして、やめる)

## 門司にて

作 内藤裕敬

和喜子

10才の頃やったかね。初めてB29を見たんよ。その日からは毎晩のように空襲やった。何千もの機雷が降下されて関門海峡は封鎖されてしまったから、一年後の門司大空襲で全て焼けてしまったんよ。

それ以前の門司はね、そりゃ賑やかやったんよ。ほとんどの銀行が支店を構えとつたし、映画館がなんぼもあつてね。

港町やろ。いろんな人や物が入りするけね。

同級生の多くがピアノを習つとつたんやないやか。楽器店が何軒もあつて。それが何にもなくなつたつちゃ。一晚で。

この先どうなるんやろうかと思つたけど、意外に早く再開したのが学校やつたね。半年後くらいには登校したんやないかな。

そしたら手の平返したように軍国教育を叫んどつた先生が、民主主義を説き始めて。それ嫌で、先生を辞めてしまった人もおつたけど、私には不信感いっぱいの新学期やつたよ。

私は、ずーっと門司やつたから、あまり若松や八幡の事は知らんのよ。やっぱり門司が一番いいわ。

小倉には、たまに行きよつたけどね……。



## 【平成24年度公演情報】

北九州市制50周年記念事業

北九州芸術劇場＋市民共同リーディング

### 「5つの街の話〜Re:北九州の記憶〜」

日程：平成25年3月2日（土）・3日（日） 14時開演

会場：北九州芸術劇場 小劇場

〔作・構成・演出〕

内藤裕敬（南河内万歳一座）

〔作〕

穴迫信一（劇団ブルーエゴナク）、鵜飼秋子（さかな公団）、塩津順子（のこされ劇場Ⅲ）、藤本瑞樹（劇団二番目の庭）、脇内圭介（飛ぶ劇場）、泊篤志（飛ぶ劇場）

〔インタビュール協力〕

板山幸枝さん、岩崎和雄さん、大庭卓朗さん、大庭文子さん、岡田重輝さん、柴田秀夫さん、和喜子さんご夫妻、田中一昌さん、恒成功さん、能美利次さん、藤江龍夫さん、福田茂子さん、矢永敬之介さん

〔出演〕

穴迫信一、板山幸枝、鵜飼秋子、内山ナオミ（飛ぶ劇場）、大庭卓朗、岡田重輝、加賀田浩二、塩津順子、恒成功、恒成アヤコ、泊篤志、守田慎之介（演劇関係いすと校舎）、脇内圭介

「スタッフ」

照明…遠藤浩司\* 音響…大村朋子\* 衣裳…内山ナオミ（工房MOMO）

演出部…権藤智海\* 照明操作…本城理恵\*

映像操作…江寄新（Ez-Artz） 舞台監督…谷川哲朗\*

宣伝美術…トミタユキヲ（ecADHOC）

写真提供・引用…中山肇、萱島寛、「北九州思い出写真館」、「北九州20年のあゆみ」

広報…鬼木身和\* 票券…木村悠\*

制作…吉松寛子\*・渡邊泰子\* 劇場支配人…久末隆彦\*

プロデューサー…館長…津村卓\*（\*||北九州芸術劇場スタッフ）

主催…（財）北九州市芸術文化振興財団 共催…北九州市 助成…財団法人地域創造

後援…朝日新聞社 協力…北九州市立枝光北市民センター

企画・製作…北九州芸術劇場